大正三年一月十五日發行（毎月一回十五日發行）

第二百二十七號

統一

學習院長としての乃木將軍の逸事　海軍大佐　子爵　小笠原長生
大正三年を迎ふ　三上義徹
開結二經の研究　井村日咸
感恩と成功　辯護士　吉田珍雄
▲詩歌　▲活動教信
人生觀と日蓮主義　大僧正　本多日生
日蓮主義の使命　オヴ、スタッフ　柴田一能

▲會　期――一月十八日正午十二時

▲會　場――帝國大學法科三十二番教室

▲本講演會は何人にても御參聽御隨意の事

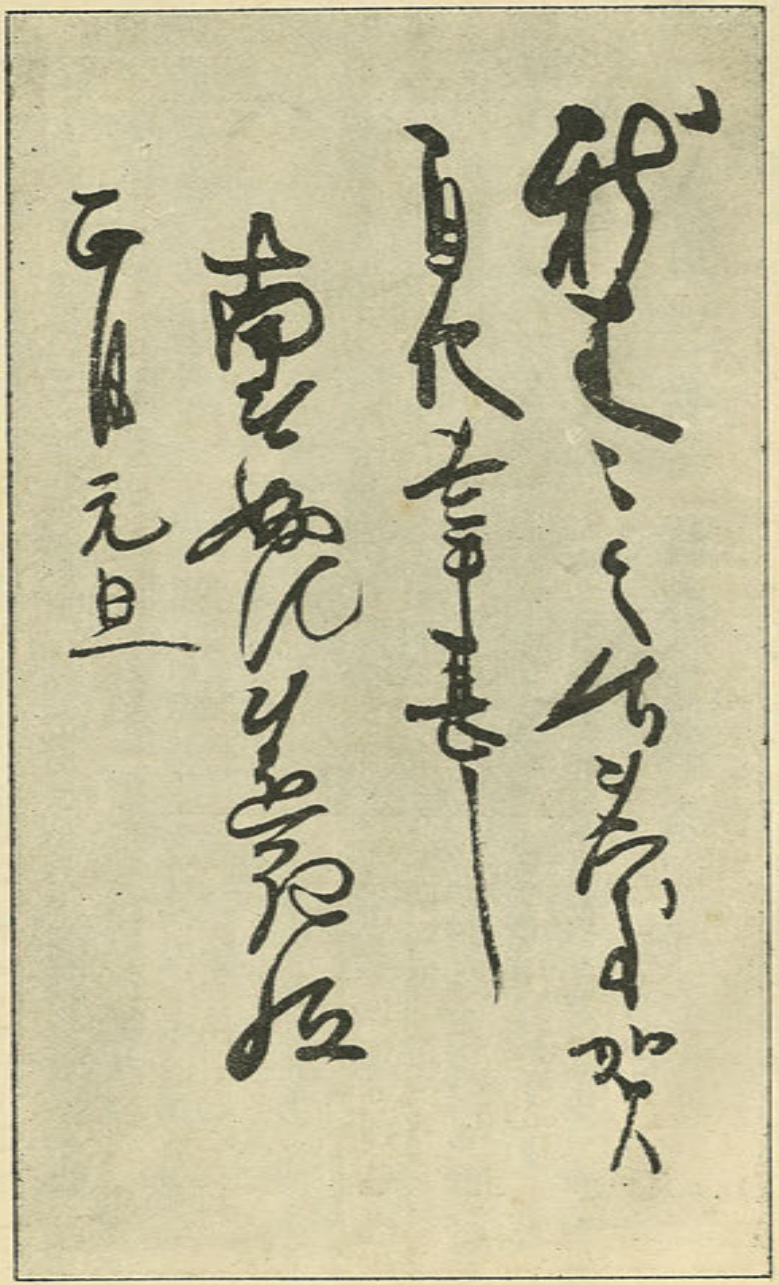
日蓮鑽仰

天晴會記念大講演會

講師

海軍少將　石橋　甫君
陸軍少將　小原正恒君
法學博士　筧　克彦君
法學博士　山田三良君
オヤスタッフ　柴田一能君

大僧正　本多日生君
僧正　脇田堯淳君
國柱新聞主筆　田中智學君
文學士　小林一郎君
唯一佛教團長　清水梁山君



大正三年の新春を迎ふ

何んな人でも新らしい年の首ほど、伸んびりした豊かな心の充實を感ずる時はなからう、吾人が新年の初頭に立つた現在は、過去が發展し來たつたもので、而してこの現在がおのづから發展して行く未來である、人間の一生は連續した一個の生命であつて、新らしい生活を展開する年の始めに、新らしい希望が輝く樣な氣持のするのは當然である、如何なる人でも新年を祝福する、即ち新らしき全生活の展開を喜ぶ心あるからであらう、この希望に充ちた悅びの心、それが生活の充實を計り創造し向上し得るのであるが、過ぎ去つた一年の生活、果して實人生を展開し得たのであらうか

試みに過去を振り返つて見よう、國の上には隣邦の支那が、麻の如く亂れたけれども袁世凱の勝利となりて一段落を告げ、また外交上には諸種の難問題が起つた樣であつたが、平靜なる解決によりて國力を動かすほどでなかつた、退いて內政治上には、聊か政見の爭はあつたものゝ、人心に影響を與ふる大問題でない、內治外交共に例年の課程を繰り返して居つたものと見て宜からう、唯だ吾人の尤も注意を惹いたのは、

近代に於ける自然科學の目覺しい進歩は、多種多樣の刺戟を加へて生活上に著しい變動をおこし、赤裸々なる現實の暴露と共に、痛切に生活上の結果を感ぜしむる樣になつて、絶えず生活難を叫びつゝ煩悶し苦惱するに至つた、それが爲に思想問題の上にも大なる變徵を呈し、飽くまでも自己本位主義を取りて動かざるやうになつた、されば從來の餘裕ある利他主義の道德は、まづ自己の生活を考慮する思想と衝突し、遂に近代思想の根抵に宿れる個人主義や、或は功利主義や唯物的現實主義は、さきに西歐文明の輸入と共に蒔かれたる種は實を結び、到る所にその破壞力を逞うし、歷史を背景とせる國民教化の思想や、日本建國の理想國民道德の權威をも、打ち壞さんことを企たるのみならず、自然主義の大旗の下に開始せる運動は、新代の人々の思想を支配して、一齊に唯物觀的傾向に突進せしめ、極端にも自我の實現本能の欲求を叫んで、廢頽的思想を產み出だしたがために、歡樂の甘きに醉ふて美的享樂に耽り、人間を以て盲目なる機械的物質の配下に措かんとするの勢に制せられ、不安と疑の灰色の雲は、その思想界の天地を蔽ひ、民心に云ひしれぬ寂寥と憂愁とを加えて、猛烈なる新舊思想の衝突の上に、互に深き溝渠をつくりて反目し蔑視し相爭ひ、前代未聞の混亂狀態を惹き起すに至つた、而し斯かる衝突は、對外關係や財政上の危險よりも、さらによ

り多く全生活の展開には深き關係があるのは勿論、團躰の共存發展の上には重要なる事件である、思想問題に於ける排斥壓迫と侮蔑反抗との二大徑路は、明かに精神上に於ける分裂である、分裂は分裂そのまゝに終るべきものでない、その根抵に於て合致するを得ざるものは、必ずや激しき衝突の火花を散らすのは當然の事であつて、即ち國民思想の危機こゝに胚胎するので、眞に實人生のために憂懼に堪へざる所、過去一年の思想界の歷程は、外來の思想に對する心醉盲從の跡を貼したに過ぎない、新らしい希望に輝く展開ではなかつた、斯の如く民心その歸趣統一を失ふて居つては、如何にして正大なる維新の宏圖を伸張し、民族の發展を期することが出來ようぞ

おもふに近代の氣運に伴ふ外來の思潮が、いかに澎湃たる勢を以て押し寄せて來ようとも、內に優然として公正なる風教の確立あり、さうして牢乎として秘べからざる國民的自覺とその自信の存するものがあるならば、一切の思想を批判し包容し、之を調節し按排して日本化せしむることが出來るのである、既に我帝國には、數千年來民心の奧底に教化を與へつゝある包容統一の大思想がある、いま現に宇宙に充塞し吾人の眼前に潑溂として靈聲あり、然るに何等の思索を施さずして過去の傳習的思想なりとし、生活問題の壓迫に苦しめる實人生には、權威なしと漫罵をこゝろみて顧みるも

の尠なかつたのであるが、天地の公道は、千年や二千年經ちしとて變るべきものでない、時間空間とを貫きつゝ超越せるものそれが即ち眞理である、偉聖佛陀の啓示せる大思想は、久遠無始以來人類の思想を啓導し、また永久無濟に亘りて人類の軌範を垂れたまふたものである、いかに自由批判が勝手なればとて、舊思想にして權威を認めずなどゝ安評を試むるは、亂暴と云つても沙汰の限りである、斯んな狀態では精神的に路頭に迷ふ浮浪者たるを免れぬ、何うして全生活の展開などとは思ひもよらぬ、年々歲々無爲の課程を繰返すのみでは、人としての生存價直がないではないか、新春の初頭に御互に芽出度と云ふ喜びの聲、そこに無限の希望を懷いて眞實に全生活の展開に努力せねばなるまい、あゝ主義なくして人生を論じ生活に惱めるもの、速かに統一的日蓮主義の思想を味識し、精進の心をいだして奮鬪し努力し向上せよ

日蓮上人の警訓

少しも妻子眷屬を憶ふこと莫れ、權威を恐るゝこと莫れ、今度生死の縛を切て佛果を遂げ令め給ひ（單子檀那中御書）

一生空して過して萬歲悔ゆること勿れ（富木抄）

人生觀と日蓮主義

大僧正　本多日生

我是如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛世尊、未度者令度、未解者令解、未安者令安、未涅槃者令得涅槃、今世後世如實知之、我是一切智者、一切見者、知道者、開道者、說道者、汝等天人阿修羅衆、皆應到此、爲聽法故、爾時無數千萬億種衆生、來至佛所、而聽法、如來于時觀是衆生諸根利鈍精進懈怠、隨其所堪而爲說法種々無量、皆令歡喜快得善利、是諸衆生聞是法已、現世安穩後生善處、以道受樂亦得聞法、既聞法已離諸障礙、於諸法中任力所能漸得入道、如彼大雲雨於一切卉木叢林及諸藥草、如其種性具足蒙潤各得生長（藥草喩品第五）

▲修養の方針

人々が精神修養に勤むるのは、申すまでもなく大切な事で、畏くも　明治天皇の御製に

おのが身を修むる道は學ばなむ
賤がなりはひいとまなくとも

と仰せられてあります、其日〳〵の生活に追はれて居る貧しい人々でも、自分の身を修め心を正す道の心得は之を學ぶべきであるぞとの御詞であります、然るに現代日本人には、この精神修養を放擲して顧みない人が少なからぬ、是は國家の前途に就て大に憂慮すべき事であります、而してこの修養は一時的な間に合せでは却つて後年大害を貽すのであります、永久に確乎不朽なる最善のものを採らねばなりませぬ、明治天皇の御製に

國と云ふ國の鑑となるばかり
みかけますらを大和たましひ

とありますが、實に我々日本人の覺悟としては、世界各國の模範となり指導者となるの考へで、世界のあらゆる道德宗教文明と比較して、之に優るやう益々進歩發達せしむる心懸けてやらねばなりませぬ、一口に精神修養と申しましても、彼の紙鳶が高く空に舞ひ上り、遂には糸が切れて雲の中に消え失せる樣に、徒らに高遠な理想信仰に傾いてもならず、　明治天皇の御製に

白雲のよそにもとむな世の人の
まことの道ぞしきしまのみち

とありますが、御詞の通りて、餘りに超絶的な思想は、人生に必要が無いのであります、又人生には衣食住が大切ではあるが、いかに大切であつても金錢や衣食にのみ沒頭して理想も信仰も顧みないならば、恰も泥の中に首を突込んだやうのもので、これ亦取るべからざる所であります、されば先帝陛下の御製に

ひらけ行く時にいよ〳〵仰がれぬ
聖りの御世の高きをしへは

と御示しになつて居りますが、餘り卑くすぎて泥の中を這ひずつて理想と信仰を持たぬのも、又高く雲の上へ迷ひ込んで此の澄澈たる實生活を打捨てゝもなりませぬ、雲の上へも拔けず、泥の中にも入らず、其兩端を併せて實生活に最も根本的解決を與ふることが必要であります、而して之を全ふするには、人生に處するの道を明むべきで即ち人生觀が大切なのであります

▲人生觀の意義

然らば人生觀とは如何なることかといふに、この世の中を何う見るか、人が一生を送るに如何なる決心で歩むべきか、其目的は何であるかといふやうな問題を考へることである、我々が意義ある生活を送らうとするには、先づこの人生觀より出發せねばならぬのである、是れに就きましては古來より幾多の賢哲が種々な方面から觀察し論議して居られるのでも、この正當な

解決を與へたるものが、即釋迦牟尼佛其人であります、夫に就ては吾人はこの社會人生の主体たる人間を第一に研究せねばならぬ、人間を研究しやうとならば其有する精神作用即ち心の研究より始めねばならぬのであります、身体は解剖しても、さて心の所在はどこか、心の實体は何物かといふに矢張り不可解であります、されば元政上人もこの妙な心を

心にも及ばぬことは何なりと
心に問へばこゝろなりけり

と詠ぜられて居る、いかにもこの歌の通りであります學校では生徒に對して、善人になれ善事を行へ、惡人にはなるな惡事は爲すなと教育致されましても、社會には罪惡は絶へませぬ、又法律としては社會の秩序、國家の安寧のために種々な制裁を設けましても、世間には惡人が少くないのであります、これは悉く心の修養が足らぬより起るのであります、夫故此の心の研究といふ事は道德や科學のみの解釋に托することは出來ぬ、更に靈妙不思議なものであります、故にこの心とは何ぞやといふ問題が人生觀の中軸をなすのであります

▲人生觀の內容

こゝに人生觀を定むるに當りては、少なくとも左の五ヶ條位のことは、明確なる意識を得て居らねばならぬ、即ち(一)生命の問題、(二)運命の問題、(三)生存の意義(四)行爲の規範、(五)安心立命の五點である、この五點に就て大体にもせよ確乎たる決心を要するのであります一体世の中は夢である　幻であるか、世人は夢の世の中とか浮世とか申しますが、果して浮世三分五厘のものであるならば、我々が力を入れるの價値なきものであります、世間では一口に慾の世の中とか、金の世の中とか、假の世の中とか濁れる世の中とか、僞れる世の中とか汚れた世の中などゝ云ひますが、果して斯くの如き價値なきものであり、又悲觀すべきものでありませうか、人生は彼れも一時此れも一時と見て、冷眼に看過すべきであらうか、人間僅か五十年と云つて輕

々に見るべきものであらうか、予は信ず、斯の如く悲觀の一面のみ見るは、確かに人生に對する誤れる見解なり、併し人生問題の眞意義は十冊や二十冊の書物を讀んだでは正解する事が出來ぬ、卽ち人生に就ての悟りを開く事が出來ませぬ、苦しも人生を憂き世と解釋し、毎日の行は凡べて煩惱の所作なりとしたならば、實に危き思想であります、これは人の性質を惡い部分の方のみ見るから起るので、人の性は確かに善の方面を具へて居る、然し人生は九分九厘までは感化を與へなければ惡人である、善人は盲目千人に目明一人の割合であらうと思ふ、實に情けない事である、こゝに修養の必要感化の大事が存して居る、故に我々はこの世に處するには眞に堅實な人生觀を根底より築き上ぐる必要があるのであります

今マグネシアで寫眞を撮りましたが、私は講演中に撮影する事を知つて居つたから格別驚きもしないが、突然であつたら驚くかも知れぬ、かやうに用意なき時に人の心を觀察したならば薄弱なものであらう、こゝに敎へとか修養といふことが必要となつて來るのであります、心を正し身を修める方法卽ち精神の修養を尤も强く自覺せねばならぬのであります、この精神を修養して置かないと、老年となるに從つて次第に寂寞荒涼を感じて來るのである、其證據は顏は衰へヨボヨボした風情となる、又あの藝者などが若い頃には花を欺く姿でも四十にもなると、實に荒んだ生活の餘が あり〳〵と現はれて來る、これが普通の良家の子女でもあれば十八九の頃は、左程の別嬪とも見へぬ者が三十位になつて却て立派な主婦となるのがあります、これは精神に苦痛も煩悶も少い安らかな生活を爲して來た結果であります、老人の顏の衰へや賤業婦の姿びた姿となる事は、心の荒みが現れたもので、卽ち最初に定めた人生觀に根據が無い爲めであります、骨董品も結構なものは古くなるほど價値がついて來ると同じ樣に、人生觀が堅實であるならば老いて益々壯んになつて、そこに老成の美有るべきであります、米國のシャトルと云ふ町を開いた印度人の婆さんは、其顏色が活

氣に滿ちた風情であります、確かに人生觀に信仰のあつた面影であると思ふ、これは精神が肉躰に及ぼす影響を遺憾なく現したのである、故に人生の生活には肉躰の欲望を滿たす丈けではなく、精神上に希望が無くてはならぬ、こゝに生活と道德と信仰とを調和した意義が尤も大切と相成る次第であります

人生の行路の第一歩としては先づ方向を定めるの必要がある、卽ち長崎へ行くべきか、札幌へ行くべきかを考へねばならぬ、これに就ては少なくとも四五の大切の心得がある

（一）生命觀

我々は生きて活動して居るが、一体其働く力は何から出て來るのであらうか、それは心からである、魂があるからである、今の日本人は生命を餘處にして考へて居る、生命を安ッポク見て居る、夫れだから新聞の三面記事を見ると三人斬五人殺などゝいふ樣な慘酷極まる事件が屢々起つて格別珍らしいと思ふ者も無い程殺伐な風潮となつて居る、畢竟人に最も大切な靈魂があるといふ事を考へないで、人を器械的に見て死とは器械のバネが止まるに外ならぬと思ふて居る、瓜や大根のやうに切つたりハッたり譯もなく慘らしい斬殺をやる者が增加したのであらう、夫婦關係でもそうである、今の日本人は体の夫婦關係は知つて居るが、我々の魂が夫婦になるといふことを知らない、夫れだから身体上の關係が毀れると直に離婚といふ騷ぎになつて仕舞ふ、かゝることは無靈魂思想より來る誤りである

現代の人は生命の問題を考へる者を却つて馬鹿者のやうに思つて居る、然れども生命の問題は古今を貫いて尤も重大な意義を有するので、我々は何を差措いても此の生命の問題靈魂の問題を明にしなければならぬ、彼の大逆事件の如きは卽ち靈魂が無いと思ふ事が主なる原因となつて居る、彼れ幸德秋水は無神無靈魂論の著者なる中江兆民の弟子である、彼れ中江が無神無靈魂論を出した時に、非常な名論でもあるかの樣に世人は先を爭ふて之を迎へ、爲めに洛陽の紙價を高からし

めたのである、この書には北野天満宮が尊敬せられて居るけれども道眞卿の靈は亡びて無い寧ろ其途中にある馬糞の方が餘程尊い、何故とならば馬糞は肥料になるけれども、神鉢の道眞卿は無いものであると書いてある、之が遠因となつて大逆事件は起つた、儒教でも生命の問題を非常に尊んで、生命の事を輕んずれば民德が薄くなると敎へてある、つまり魂の問題を輕視するとそれから延いて種々な病見が生ずるのであります昨日は衆惡を犯したけれども、今は後悔して善い事を考へて居るから、昨日の我と今の我とは別であるといふ樣な刹那主義も起る、現代の人はこの刹那主義に傾いて居る、小說や劇などを見てもすぐわかる、電車へ乘つて何處へ行つたとか、臺所の隅で猫がドーしたとか書いて見たり、芝居でも忠臣藏の通しといつたやうなことをやつたものではなく、一曉の中に悲劇、喜劇、歌劇などゝゴチャ〳〵に演じて居る、斯樣な事は皆刹那主義の現はれであります、此等の刹那主義は生命問題に就ての根本の誤解より來るのであつて、こゝに大斧鉞を下さねばならぬのであります、鈴井竹庵は麗物を見て其局所へ膏藥などを張つて病源を治する事を知らないから、ます〳〵中の方へ應りて來る、現代の施設は多くこの竹庵式である、この日蓮鎭仰の會は生命問題に就ても、根本的解決を與ふるものであります、病源に向つて療法を施すものであります

然らば生命はいかに解釋すべきかと云ふに、少なくとも生命は連續的のものと考へねばならぬ、進んでは久遠不滅のものであることを知らねばならぬ、例へ我々の身體から手を切り足をもぎ取つても靈魂は依然として存在して居る、又この肉體が亡びてもこの靈能ある生命は永久不滅に存在して居るものである、生命はかく連續しかく不滅なるものであると共に又大なる力あることを考へねばならぬ、人間の行動は生命があればこそ起るものであつて生命の爲めの身體であるといふてよろしい、即ち生命の爲めにこの肉體は存して居るのであります、人間の喜怒哀樂の感情も親子兄弟の情誼も悉く心の現れに外ならぬのであります

(二) 運命觀

世の中には隨分正直な心掛けのよい人でも、金の儲からない人もあるし、又いかに美人であつても緣なくして獨身生活の不幸を嘆ずるものもある、人生はかやうに意の如くならぬ、卽ちマヽにならぬ世の中であるが、この運命は道德や敎育では解釋の出來ないものである、夫れは人生を深い根底から說明せられて居らない故であります、現代の人々はこの運命に迷ふて恰度暗がりの中を歩いて居る有樣である、さればと云ふて迷信によつて運命の根據を定めることは出來ぬ、我國には九星とか易占などの根據なきものによりて、人生の方向を定めやうとする迷信が行れて居る、これは日本に運命に就いての堅實な立脚地のない證據である、最も悲むべく憂ふべき事であります、世は二十世紀の文明といふけれども都鄙數十の新聞紙上には、この九星とか姓名判斷とかいふ樣なことを掲げて讀者の意を迎ひつゝあるものが少なからぬのである、新聞の九星欄によつて其日の進退を決して居る樣な人が此の中にも二十人や三十人はあるかも知れぬ、斯の如き淺薄なる運命觀は國民の思想を誤まらしむるものである

佛陀釋尊は人生の運命に就いては因果の法則に照らして尤も嚴密にせられて居る、又孔子も易經を書いて運命觀を定めやうとして居るが是は決して完全なものではありませぬ、人の運命は自分の働き奈何によつて變つて行くもので、恰度百姓が田を耕すが如くに、運命は自分で努力を加ふることによつて、徐々に開拓さるべきものである、牡丹餅は棚から落ちて來ない、手を出さずに落ちて來るものは天井の煤位なものである卽ち吾人の運命は善因善果惡因惡果の法則に從ふものであつて、中には隨分よいことをしても惡いことが來るといふ人もあるが、それは途中を見て居るからそう見えるのである、途中はドーても一定の法則といふものは動かぬもので、卽ち因果の法則と人間の努力とを合せて運命の軌道を知ればよい、我々はどこまでも確然因果の大法則と自分の努力とを信じて進まねばなら

ぬ、我々人間は何の爲めに生きて居るのか、行當り次第のやうである、犬も歩けば棒にあたるの主義に安んぜらるべきか、又たゞ道德を守るためのみに生存して居るものであるか、又食ふために生活して居るのであるか、また何の意味もなく生きんとするものであるか

お老爺サンはもはや年を取つたから御隱居でもなすつて、何か甘いものでも召し上つたらよいてせうといふと、もうおれは何もいらぬといふ、何をすゝめてもおれはそんなものはいらぬといふ、然らば七十七の喜の祝ひや八十八の米の字の祝ひや、百歳百二十五歳までもこんな風で生きやうと思ふのは何のためか、矢張り無意味なものになつてしまふ、生きて居るといふ價値が更にない、然れどもナンとなく死にたくない、人はたゞこの生命の保存を樂しうとする、芝居を見るのも面白い、自働車に乘るのも愉快だ、或は風景絶佳の地に遊ぶも亦樂しいが、これ等はすべて一時的の慰安であつて、瞬間の解脱に過ぎない、居酒屋で一杯引つ掛けて陶然として居る間は生活難を忘れても家に歸れば女房や子供に取まかれてこの解脱は直ちに破られて仕舞ふ、斯かる一時的解脱で滿足の得らるべきでない、我々は永久に光ある而して何時にても力を與ふる解脱を求めねばならぬ、或る時孔子が多くの弟子を集めてお前達は何を理想として居るかと尋ねられた、弟子共は私は政治家となりたい、道德家となりたいなどゝ申しましたが、其中で曾子許りは私は子供を二三人連れて、景色のよい處で悠つくり遊んで見たいと云はれたすると孔子は予もお前と同じ考へだと云はれた、これ皆解脱の意味である、現代の人々は一時的解脱已上に進むことを知らぬ、物質的の快樂によつては永久の解脱を得ることは出來ぬ、丁度烏が鵜の眞似をするやうなもので到底出來ない相談である、今の日本人には實に愚かな烏が多いのである

(三) 生存の意義

人間が世の中に眞正な解脱によりて生きて行かうとするには、精神的生活、信仰の生活に進まねばならぬ

人は勿論パンのみにて生きられるものでない、固よりパンもなくてならない事いものではあるが、精神と肉体と併せて生きねばならぬ、即ち金も德もなければならぬが、更に進んで云へば信仰を有たねばならぬ、

先帝陛下は我國民にして生を遂くる事能はざるものが一人でもあるならば誠に悲しひべき事であると仰せられましたが、これは即ち此の日本人全体を我子と見玉ひその赤子の一人にてもが、生活の喜びを失ふならば、誤は甚だ悲しく思ふとお嘆きなされたのであります、而して解説の信仰に生きる精神的生活、是れ目下の社會が要求せる痛切なる叫びである、其處で道德を教へて信仰を與へざるは大なる欠陷である、日本では年々四千人に近い自殺者を出して居るのであります、これは要するに生の希望を失ふからである、彼の喜然として進行して來る汽車のあの冷いレールの上に、青春の身を横へて苦境を脱れんとするを思へば實に憐むべきであります、あゝ彼等も我が同胞の一人であります、この悲慘な心狀はたゞ自殺する程の人をのみ襲ふのではない、彼の一世の寵兒桂太郎公の、新政黨の組織未だ成らざるに不幸病を得て仆れんとするや、河野廣中氏を病床近く呼び寄せ、其痩せたる手に彼れの白髮を握りアー河野サン何分頼む頼むと低い聲で話された光景は如何でありますか、之れも亦悲慘な最後と云ふべきである、諸君よ眞の解脱に達せざる人々の悲むべきこの光景を思へ、此に人生問題の絶大なる意義が存するのである、天下の富豪岩崎彌太郎が病床にあつて饑餓が一抔食べたいと言つた時、醫者はモー到底絶望であるから病人の望むがまゝに、うどんを食はせてもよいと云つたが食べられぬ、それて一寸位に切つてすゝめたがそれもはいらない、更に之を五分位に切つて舌の上に乘せて見たが矢張り通らない、終には鳥の羽に汁をつけて漸く口を潤ほすのみて了つた、億万の富を持つ富豪の末路もこゝに至つては悲慘である、信仰なき人の終りは凡べて斯くの如く弱い哀れなものであります、身は全歐の權を統べた英雄ナポレオンも、其百戰の劍折れて獨り寂しきセントヘレナの孤島に於

て、衰れ今はの床に眠らんとした時、蓋世の英雄は何を叫んだてせうか、人生に最も必要なものは宗教の信仰なりとの語ではないか、又古着屋の小僧から仕上げて支那大陸を一統した秦の始皇帝も其雄圖成るや、身老いんとするを怖れて蓬萊に不老不死の靈藥を求めたが中途に於て崩じたのである、金錢を以て生命とし、權力を以て生命とし、名譽を以て生命とするものは憐れてある、世の信仰なき人々よ、汝は生存の意義を何れに求めんとするか、聞けよ宗教は人生に最後の光を與へ、而して其生命をして不滅ならしむるものなるを更に言ふ信仰は人生生活の全體に亘りての光りてある人生はパンのみによつて生くるものてない、又道德のみによつて生くるものもない、パンと道德とを調和し更に高き信仰を與へて全き生活に入らしむるが宗教の本旨てある

（四）行爲の規範

人間行爲の規範は天地間に於ける最も尊い動かすべからざる法則より發して居るべきてある、我々は太陽の光には頭を下げねばならぬやうに、行爲の標準には絶對に服從せねばならぬ、卽ち太陽の光を睨むことが出來ないと同じてある、私の友人に日露戰爭に出征して日の照る時に、雪の上を歩んて眼を惡くした人がある、又岡山に一人の狂者があつてこれは太陽と喧嘩する癖のある奴て、太陽がキラ〳〵と輝くとこれを睨み返す、それて終ひには眞青になつて仆れて仕舞ふのてある、只照すのだが我々は日の光りに對しては何うしても反抗する事が出來ないがそれと同じく天地の法則には絶對に服從せねばならぬ事がある、又月といふ優しい光りがあつて、凡ての人畜草木に慈悲の光を與へて居る、天には日の權威と月の慈愛とが存して居る、人は權威には頭を下げ、慈愛をば慕はねばならぬ、この權威と服從慈愛と儀仰これが人間道德の基てある、日本の道德も敬ふといふ事と慕ふといふことが根底てある、日本の道德も元來天地の公道に基いて起つて居るのて、親に孝行するとか、君に忠義を盡すとかいふ

事も根源は一つてあります、日本の道德は自由てもない、獨立てもない、從ふべき所に從ひ尊ぶ可き所を尊び慕ふべきを慕ひ盡すべきを盡すにあるのてあります

（五）安心立命

人生は一筋縄ては行かぬ、從來の宗教には淺薄なる安心立命を說いて居るものが多い、人生はいつも善惡の戰ひがあるからと云ふて意義なく仲直り妥協をして善惡混合すべきてない、親子てカッポレを踊るやうの事はいけぬ、惡が多ければ多いだけ立派な精神を起して、惡い事に出遇ふ度に之と戰つて新たなる正しき力を增さねばならぬ、日蓮聖人は惡い人を敵とせずこれを導き、惡い事に出逢ふ毎に奮鬪して正しき行を進められたが、斯くあるべきてある、世の中が腐敗して居るからといつて、其腐敗に雷同するは尤も誤りの大なるものてある、益々進んて之を覺醒するやうに努め、そこに安心立命の地を見出さねばならぬ

▲結　論

かゝる意味の宗教は何處にありや、現代の教育に於ては生命の問題、運命の問題を忘れて居る、生命の意義を明かにしない、道德の事にしても天地間の法則より導くといふ根底を逸して居る、只名譽と金錢とを目的とした教育てあります、現代人の內部生活に資する教育は全然欠けて居るのてある、宗教の方も健全なる人生觀を與ふるものが少ない、獨り日蓮主義はこの欠陷を補ふ大主義大教義を有して居る、要するに健全なる人生觀は日蓮上人御一生の行動が最も明かに說明して居るのてあります、夫故に諸君は、是非日蓮上人の御人格と主義とに就て、益々研究の歩を進められんことを切望する次第てあります

日蓮主義の使命

マスター、オヴ、アツツ　榮田一能

▲日蓮主義と戰鬪的態度

本日は例年一回と云ふ本化行學會の講演大會にお招きを受けて、始めて諸君に會見を遂げて卑見を陳ぶるの機會を與へられた事は、此上もなき光榮と存じます

諸君が始めて私の顏を御覽になつて、第一に浮んだ感想は、私の人相の善くない事、就中眼つきが險相で何となく喧嘩腰をして居ると云ふ事で、是が何か日蓮主義と必然の關係を有して居りはせぬかとのお疑も起つた事であらう、私の人相に就ては、色々の原因がある、先づ第一に國民の義務として兵役に服し、殊に日清日露の兩戰役にも從軍して殺人の大罪をも敢てした事を始めとして、青年の時代から日本固有の武術が好きて、お面の中から相手の眼を睨んだり、柔道の修行で敵の一寸の動作にも氣を配り、細かい注意を用ゆると云ふ樣な多年の習慣で、現に自坊の門前に一棟の道場を構へて、毎晩町の青年や中學生などを集めて、エイ總の掛聲勇ましく盛んに武道を磨いて居る次第で、自然と眼光も鋭くなり、面相も穏和でなくなつたのであるが、一方から言ふと我日蓮主義なるものが、元來戰鬪的態度を取つて起つて居るので、精神的にも自から斯る主義の感化を受けた爲めである、如說修行抄に『かゝる時刻に日蓮佛勅を蒙りて此土に生れけるこそ時の不祥なれども法王の宣旨背き難ければ經文にまかせて權實二教の軍を起し――日蓮愚けしたり若黨共二陣三陣と跡をつぎ、天台傳教にも超へ龍樹迦葉にも勝れたる功名せよかし』など、其他類似のお言葉は擧げ盡せぬ程で、日蓮主義は抑の始めから戰鬪的態度を採つたのみならず、此態度は恐らく四海歸妙の理想が實現せられるまで繼續するであらう、然り大上人の御一生は、實に苦戰奮鬪の血の歷史である、若も現在の因は過去に求め、未來の果は現在の有樣に依て決せられる事が眞理であるならば、右の推斷は强ち無理ではあるまいと思ふ、

▲四個の格言は愛國護法の赤心

そこで順序として、六百年前の歷史上の事實に溯ぼつて證明せねばならぬが、大上人の立敎開宗の當時に於ける有名なる四個格言とは、抑も何であつたか、疑もなく之は立派な宣戰の布告で、法華正義の旗揚げに外ならぬ、法華經は日蓮一代の日記なりと活釋を下し給ふた精忠無二、愛國護法の赤心が天眞の儘に流露したので、法華經に對する純信は斷じて世を詐り已れを欺くことを許さぬので、後の樣な熾烈な絕叫となつたが、其眞相は御在世の當時より解せられず、誤解は更に誤解を生むの例で、今日でさへ上人を以て、佛敎中の八家九宗と數へる各宗各派對立の意味に於て、一宗を創立せんが爲の手段として、餘他の宗宗を故らに罵詈讒謗したのであると思つて居る者が多い、現に大上人御自身の口より『日蓮は孰れの宗旨の祖師にもあらず』と立派に斷られて居る、若し强て宗名を付けたいとならば、釋迦正宗若くは佛立宗とも言ふべきで、當時の佛敎各宗、其中でも最も勢力のあつた四宗が、佛敎の本旨を誤まり釋尊御出世の本懷を發揮せざるのみならず、還つて佛の顏に淤泥を塗る樣な不忠不孝の謗法罪を犯し、從つて其敎を信じて居る當時の爲政者が國體の尊嚴を瀆し、不忠不義の有らん限りを振舞ひ、天下萬民亦敢て之を怪むものなく、日本六十餘州を擧りて誰一人侃々愕々の議を唱へて、正義の爲に殉ずる者がなかつたのである、

▲大上人出世の本懷は四海歸妙

大上人の御出世は於是乎大なる意義を有て來るので、

末法應時の大導師本化上行の再誕と云ふ事も『明かなること日月に如かんや淨きこと蓮に加かんや、日蓮と名乘ること自解佛乘とも謂ふべきか』とのお言葉も、皆以上の背景から自から湧き出して來た大上人の信念で、諸君の頭の上に大書に張り出されてある、『如日月光明能除諸幽冥』の經文の如く、法華經の正義は諸の罪惡闇黑を照破する日月の光明であり、又諸の穢れや惑れを淸める蓮の德用を兼て居る、幽冥を照すことの出來ない光明ならば有つても無きに等しく、何等の役をも爲さない、釋尊の御出世も無意味であり法華經の存在も娑婆塞げの邪魔物である、即ち大上人出世の大目的は、一天四海皆歸妙法で、即ち世界と妙法との一致融合を事實に現はすと云ふ事に外ならぬ、而して此の如き大規模の精神的世界統一の實現は、先づ我帝國を基點とし中心として運動を起すので、『一閻浮提の内漢土月氏にも勝れ八萬の國にも超へたる國』として、萬國無比の國体を有する我が王道と、宇宙の最高德敎たる法華經主義の佛法とが歸一冥合して、所有思想信仰に統一的歸趣を與へ、以て我帝國が世界に對して先天的に負ふて居る大日本の大なる所以を完うせんが爲である、日本は世界の一等國に相違なく、世は第二十世紀に進んで來たに違ひはないが、大日本の大の字の深旨を理解して居る者が果して幾人あるであらうか、政治家と言はず宗敎家と言はず、敎育家でも軍人でも、商人でも百姓でも日本人の全体を擧げて、斯の如き靈的大日本の眞の自覺に長夜の眠より醒めしめ、我等帝國の臣民は男女老幼各其分に應じて、斯の偉大なる靈的事業に最善を盡す事の出來る名譽と光榮とを擔つて居る佛子であることを悟らしめて、大歡喜の裡に奮鬪努力以て大佛事を爲すのであると云ふ信念を鼓吹するのが、日蓮主義の使命であると信ずる、個人の成佛と云ふも、將た國の成佛と云ふも、要するに此意味を外にしたものではあるまい、

▲政敎問題の解決—法力と國力の相依

本夕の施本は佐藤少將が陳べられた『法國冥合』と云

ふので、偶然にも私の講演の不備な所を補ふ爲に用意せられたのであるかの樣な妙因緣で、大上人が此理想を實現する爲に執られた方法は二通りに分れる

(一)各宗敎に對する方面＝敎＝躰

(二)國家社會に對する方面＝政＝影

政敎の關係は今日も尙八釜敷い問題であるが、日蓮上人は立正安國論の中に、『夫れ國は法に依て昌へ、法は人に依て興し、國亡び人滅せば佛を誰か崇むべき法を誰か信ずべき、先づ國家を祈りて須らく佛法を立つべし』と事明白に其關係の密なる所以を解釋せられ、難易抄の中には『佛法漸く頽倒しければ世間亦濁亂せり、佛法は躰の如く世間は影の如し、躰曲れば影斜めなり』と云ふ巧妙な譬を出され、ソモ國家の發展隆昌は法力卽ち國家の理想に一致せる信念の涵養に待たなくてはならぬと共に、法力の運用如何は其國家の力に賴らねばならぬ、妙用と云ふ事は總じて二法の合一から起つて來る靈的作用である、火打石と鋼鐵とが合はなければ火は金輪際出る氣支はない、

▲鎌倉時代の概觀—新宗敎の勃興

斯の如き立脚地から鎌倉時代を見下して觀るに、一方社會的事相としては、平安朝の公家時代が一轉して武家の時代に移り變り、他方思想界の内部には新宗勃興の氣運が盛んに萌えて、兩面共に一大變動の時機に遭遇したのである、奈良朝の佛敎は先づお預りとして、近く平安朝から引繼だ佛敎では、叡山延曆寺を根據とする天台、京都東寺を中心とする眞言の二宗が中々の勢力で、所謂官僚佛敎の弊は僧侶の尊敬が度に過ぎて、增長の結果遂に僧兵なるものが出來て、叡山が最も甚しかつた、卽ち開祖傳敎大師の立てられた根本中堂を眞中に、東塔、西塔、橫川に亙つて三千坊と註せられた、お山の鎭守に山王七社の權現及び數百の末社があつて、僧風の頹廢は言語に盡せぬ程で、奈良の諸大寺、三井の園城寺皆其類に漏れなかつた、新宗敎の勃興は避くべからざる勢であつた、

▲新宗敎の使命—四宗の概況

(一)念佛宗は當時戰亂の慘憺たる有樣を目擊して、夢の如き人生榮枯の變遷、無常迅速の世相を觀じて、痛切に生死の問題にも觸れ、專ら現世悲觀の產み出した宗旨である、根據地は固より京都で總大將は法然上人、鎌倉では光明寺に然阿良忠と云ふ法然上人の弟子が、門戶を構へて頻りに傳道に努め、親鸞上人は此時早や五十才前後で、慥か常陸の稻田に居られた時分である

(二)禪宗は當時主に榮西の將來した臨濟禪で、當時の武士肌即ち軍人氣質たる素朴恬淡、直截簡明で上面倒な理屈を厭がると云ふ習慣に旨く合つて、執權北條一家を始め有力なる旦那を持て居つた、建長寺の蘭溪、道隆など支那の歸化僧で、所謂名僧碩德として四民の尊敬は非常であつたらしい

(三)眞言宗は新宗教ではないが、純然たる祈禱專門の宗旨で、主として現世の除災消厄、鎭護國家を表看板にして頻りに人心の弱點に喰込み、是亦中々の勢力であつた、

(四)律宗は當時の僧風の墮落、別して叡山僧兵の我儘放題なる振舞に憤慨して、佛法の挽回は獨り此僧風の復古にありとの考から、盛んに戒律を振り廻はしたのである、奈良に南京律、京都に北京律などゝ唱へて南北互に相競ひ、大悲菩薩と言はれた覺盛、興正菩薩と敬はれた叡尊なんどが指折りて、有名な極樂寺の良觀（後に忍性菩薩）は生如來樣と渴仰されたが、後に日蓮上人と雨乞の大失敗を演じて兜を脫ぐ樣な始末……

▲立正安國論は大日本の自覺に甦れとなり

以上は當時最も勢力のあつた宗旨で、四箇格言の槍玉に揚げられたので、孰れも當時の人心を解釋すべく生れ出てたる救急的對症療法であつた、固より末法萬年の末來までをも救濟すべき大理想根據の上に打立てられたものではない、寧ろ刻實して言ふと、政治の實權が京都から關東に移つた結果、衆生濟度と云ふよりも先づ自らが旨い物に有りつかねばならぬとあつて、恰も遊牧時代の蠻人が水草を逐ふて居を移すた樣に、或は水の低きに流るゝが如くに、續々と踵を接して鎌

倉に移住したのである、末法萬年は愚か十年の目先も怪しかつたのであらう、撰時抄に當時の僧侶を描いて

『今は鎌倉の世盛なる故に東寺天台園城七寺の眞言師等と並に自立を忘れたる法華經の謗法の人々關東に落ち來りて頭を傾け膝を屈めやう〳〵に武士の心を取り入て諸寺諸山の別當となる』『法師は諂曲にして人臣を迷惑す』等の痛快な文字がある、北條氏の暴虐其極に達して、竟に三天皇を三箇所に配流し參らする樣な不忠不臣の行も、必竟は彼等を指導すべき宗教家の無能の致す所で、有つて甲斐なき佛法の有樣、是には先づ彼等各宗の邪義を矯正して純信に歸らしめ、天下を率ゆべき爲政者より濟度して法國冥合の理想、大日本帝國の自覺に甦らしめねばならぬとの考から、彼の有名なる立正安國論の建白となつて、一層の迫害に取圍まれる事となつたのである、委悉の說明を略して上人御自身の御言葉の二三を引かう、『父母の面を踏み天子の項をふむが如くなる者國中に充滿して上下の師となれり、爭てか國亡びざるべき』

『佛法の邪正亂れしかば王法も漸く盡きぬ』

『方今世の亂るゝや伊豆の民たる義時が下知に從ふが故なり――日本國に代初まりてより謀反のもの二十六人、第一は大山の王子乃至第二十六人は義時なり』

『民の身として天子の德を奪ひ取るは下剋上、背上向下、破上下亂等是なり――天下第一、先代未聞の下剋上』其他擧げ來れば際限もないが『苟も世を安んじ國を安んずるを忠と爲し孝と爲す』と言ふ大上人の燃ゆるが如き忠君愛國の至誠は、實に懦夫をして起たしむるの概ありて、熱烈深刻なる大信念の叫びは、一言一句、人をして血湧き肉躍るの感に堪へざらしむるのである、

▲日本建國の大理想―神武の聖勅

世界統一の天業は、日蓮上人一個の發明でもなく空想でもなく、太初日本帝國建國の精神で、畏くも神武天皇御卽位の勅語にも『上は則ち乾靈國を授くるの德に答へ、下は則ち皇孫正を養ふの心を弘め、然して後に

六合を兼ね、以て都を開き八紘を覆ひ、以て宇となすこと亦可ならずや』とあつて、世界統一萬國照臨の宏謨は、昭々として火を指すよりも明かではないか、而かも此の精神的世界統一の中心生命となるべきものは、『内典の孝經なり』と活釋せられた法華經で、如說修行抄の『天下萬民諸乘一佛乘となつて妙法ひとり繁昌せん時、萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉る』樣になれば、是が即ち淨土の建設で、日蓮主義の淨土は、此方から出掛けて娑婆を離れた西方の國土に住生するのではなく、寧ろ極樂を此娑婆に引き降して來るので、今更の樣に萬國平和會議だの平和協會だのと騷ぎ立てるまでもなく、萬民一同に此の法華經を持ちさへすれば、其ぶ永久的平和實現の唯一方法で、大上人は六百餘年の昔に聲を潤して主張せられて居るのである

▲信仰問題の解決と日本人の一大缺點

眼光一轉して現在我國の思想界の狀態、並に社會の實情を觀察して見るに、大上人御出世當時と同じ樣に正に社會人心の一轉化を促進しつゝあるので、殊に明治文明の一大缺陷であつた信仰問題の解決は、近く大正文明第一着の事業として遂行させなくてはならぬ事と思ふ、昨年の三教會同を手始として此間の三教者招待會の如き宗教大會の如き、何れも此間の消息を語りつゝあるもので、宗教は固より教育も政治も商工業も、一切皆日蓮主義的卽ち大日本的にならなくては駄目である、現代社會の各方面に曝露しつゝある醜態は、日々の新聞記事でも澤山で、一々列擧するにも及ばないが、一等國として世界に對して遜色のないのは、過去の軍人の强かつた事と監獄の罪人の數の多い事とであるとは如何にも情ないではないか、要するに日本人の一大缺點は單に目前の利害、而も自分のみの利害に汲々として其精神に一定の主義確信の無い事、卽ち精神上の統一が無く從つて其生活の價値の少ない事である と信ずる、教育普及のお蔭で悧悧な人は澤山出來た、而も主義なく節操なき浮萍的の有樣は堂々たる政治家でさへ御存じの通りではないか、『弟子一佛の子と生れて諸經の王に事ふ、何ぞ佛法の衰微を見て心情の哀惜を起さゞらんや』て獨り佛法ばかりの衰微ではない、苟も佛子の自覺に甦つた我々は、如何して現代の腐敗墮落を默つ 居る事が出來やうぞ、四海歸妙の御遺訓が、儼然として存して居る以上は、我々日蓮主義者は日月の光明の如く能く諸の幽冥闇黑に對して正義の戰を起さねばならぬ、法國冥合の實現さるゝ迄は我々の奮鬪主義努力主義は、一歩も退く譯には行かぬ、實にや『日蓮が弟子旦那と名乘らん者は臆病にては叶ふべからず』てある

▲世界統一は誇大忘想なるか

日蓮主義の使命の重且つ大である事は、不充分ながら前來の所說て大略お解になつた事と信ずるが、今日となつても尙六百年前の迷夢が覺めないで、世界統一などゝ言ふ事は、痴人の囈語てあると思つて居る者が鮮くないが、之に就ては我主義の一勇將たる高島平三郎君の『世界統一は誇大妄想なる乎』との講演て、充分彼等の迷妄を說破せられて居るから、天晴會の講演錄に就て御一覽を願て置て、私は終りに臨んて、世界統一の理想に向つて着々實行の歩を進めつゝある二個の新事實を御披露して、願くは我が五千萬の同胞が擧つて大上人の御主張に耳を傾け、眞に我建國の大精神と法華經の實義の深旨を了解して、大日本國民たる自覺を喚び起して貰いたいのである、自覺とは外てはない我々日本人は先天的に日蓮主義者てあるべき筈てあつたと云ふ事を豁然大悟するのてある、或は日蓮の二字が耳障かも知れぬ、それならば法華經主義てもよい、其も變だとあらば大日本主義てもよい、大日本國に籍を有て居りながら大日本國民たる事は嫌だ、大日本主義は氣に入らぬとは言はれまい、否好も不好も、氣に入るも入らぬも有つた義理てはない、忠良なる帝國臣民たる以上は、何うしても遵奉し履行せなければならぬ先天的の義務てあり約束てある

▲第二十世紀は獨乙のものなり

つい此間の事或公會の席上で、獨乙皇帝は獨乙の理想に關する大演說中に『第二十世紀は獨乙の有なり』との宣言をされた、試みに見られよ、獨乙は近來社會百般所有方面にメキ〳〵と頭を擡げて來て、天下無敵と稱せられた米國の商工業をも、遠からずして壓倒せては已まぬの勢を示して居るのみならず、今や皇帝は世界的大新聞事業を經營して、世界東西の首都に其支局を設け、筆鋒を揮へて世界の民心を獨乙化せしめんとの計畫で、先づ英京並に佛都に向つて、其運動に着手せられたと傳へて居る

今一つは、萬國基督教青年會の總幹事たるモット博士が、過般カンノンホテルに於けるプライス氏の午餐會席上で、例の雄辯を揮つて『現代學生の道德及び宗教の中心』なる演舌中……

世界諸大學中露西亞の大學生の自殺は最大多數を占めたものであつたが、其主因は露西亞が常に壓制を加へて、若い學生が新時代の宗教に走るのを抑止した爲で、萬國基督教青年會は、此方面に活動を開始して、以來非常に好成蹟を擧げたのであるが、來年度の吾人の活動は土耳古でなくてはならぬ、今や千載一遇の時である、土耳古の精神の征服と救濟は、アングロサキソン族の手に收められなければならぬ、然り之はアングロサキソンの使命でなくてはならぬ

支那問題も大切には相違ないが、支那を論ぜんには豫じめ日本の思想界の事を知て置く必要がある、日本は世界中の大教育完備國の一であつて東洋の覇である、然るに此日本人たる今や全く軍國主義に落ち物質主義に支配されて仕舞つた、世界の本流たる平和思想の方に回轉せしむるものは、日本基教徒の責任である、更に支那に注意と實行とを與へなくてはならぬ、爰に二重の責任がある譯だ、日本は慥に前例のない時代に立て居る、最初はトン〳〵拍子に思つた通りになつたが、今では非常な逆境に立つに至つた、即ち救濟されなければならぬ時が來た、古い道德と古い思想は嵐に吹き拂はれて轉回期が來た、心あるものは何所に道德の根底と生活の基礎とかあ

るかを探しつゝある、夫が其が基督教だと信じて居るものも少くない、兎に角基督教であるなしに拘らず、何れも猛然として要求して居る所のものが有ることは爭はれぬ云云

世界統一が詩人妄想であるかないか、是でも眼が醒めぬとあつては手の着けて見やうもない、唯亡國を待つより外はない、一切の革新運動は田舍から起らねばならぬ、都會は到底頼みにならぬ、願はくば益其責任の大なる事を感じて、先づ地方からドン〳〵革新の實を擧げてほしいのである、『日蓮が一類は異躰同心なれば人々少なく候へども大事を成じて一定法華經弘まりなんと覺へて候』との覺悟を以て、彌々奮鬪努力、不惜身命ならむことを切望する次第である

虎に關する史話

▲虎が孝子を惠んだ話は二十四孝の内にもあるが、支那の國には尤も多いので、宋の朱泰貧乏で薪を鬻いて母を養ふ、或時虎來り泰を負て去らんとした、泰聲を勵まして我を惜むに足らず母を託する方なしと歎くと虎は靜かに逃げ去つたと云ふ、又南嶽の慧思は、山に水なきを患ふると、二虎あり師を引いて嶺に登り地を跑て哮ると、虎跑泉として素敵な淨水が涌いて出たと云ふ、唐の豊于禪師が、虎に騎て松門に入たは名高い談だが、後趙の竺佛調は山で大雪に會ふて難澁した時、虎が窟を讓つて其内に臥しめ、無事に下山するを得たと云ふこともある、又孔子山に遊び子路をして水を取らしめた、水の所にて虎に逢ひ戰ふて其尾を攬り懷に入て歸る、孔子に問ひけるは上士虎を殺す如何、子曰く虎の頭を持ち、又中士の作法を問ふと、耳を捉ると答へた、下士虎を殺さば如何、虎の尾を捉ると答へたと云ふことが衛波傳にあるが、この問答は實に面白い

學習院長としての乃木將軍の逸事

（乃木會に於ける講演の筆記）「後援」より轉載す

海軍大佐　子爵　小笠原長生

▲奇行と云ふ樣な事は一つも無い

私は、唯今御紹介を得ました小笠原と申す者であります、唯今市長閣下から御話のありました通り、昨年の本日は先帝陛下の御大葬儀を行はせられた當日であるのみならず、絶世の偉人乃木將軍及夫人の殉死せられたと云ふ事が、我々帝國民に取つて忘る可らざるの日となつたのであります、それで此の乃木會で講演會を催されたに付て、私にも出席せよと云ふ事でありましたが、將軍の事に付きましては私にも從來諸方から講演の御頼みがあつたにも拘らず、一度も出席して居らなかつたのであります、それは自分に少しく考が有つて御斷りして居つたので、私のやうな若輩が將軍のやうな偉人の事を輕々に御話をして、萬一にも誤を傳へるやうな事があつたならば後の思想界に非常な惡影響を及ぼすと思ひましたからであります

然るに此度は大迫現學習院長から是非出席して、學習院長としての乃木大將の逸事を御話したら宜からうと云ふ勸告もありましたし、多少調べもつきましたから參上した次第であります、併し今日までに將軍に關する著書も、澤山に出版されて居りまするし、諸名士の講演等も數多く有るのでありますのみならず、既に今日も是から石黒男爵、井上博士等の有益なる講演が有るのでありますから、私のは實は所謂蛇足に過ぎないのであります、であるから成るべく簡短に、一つ二つ將軍の逸事をお話いたすことにとどめます、殊に私が乃木將軍の知遇を得ましたのは、將軍薨去前數年に過ぎないので、後の明治三十七八年戰役には、私も滿州丸といふ船で戰地に參つては居りましたけれ共、其當時までは將軍とは一面識も無かつたので、唯寫眞等に依りまして乃木將軍といふ人は、非常に頑固な將軍であると云ふ事を、聽氣に承知して居るといふ位の事でありました、然るに旅順攻撃の悲壯なる戰史……二愛子を君國に捧げられた將軍の誠忠は、不知不識の間に私をして敬慕の念を起さしめたのであるが、未だ親しく面接したことは無かつたのであります、所がそれが凱旋後になりまして、伊東祐麿子爵即ち今の伊東元帥の令兄に當る方の薨ぜられました時に、伊東元帥の處へ私が弔詞を述べに參りますると、圖らずも餘所ながら知つて居る乃木將軍が、馬で玄關へ來られて居つたが、馬丁が附いて居らなかつたので、馬から下りられたけれ共、玄關の呼鈴を押して刺を通ずるには、馬を放さねばならないので、さも困つて居られるやうに見受けましたので、私が脇から『私が押しませう』と申しまして、代つて鈴を押したのであります、すると將軍は大層喜ばれて、や、これはと慇懃に挨拶をせられた、其溫情溢るゝ態度は、嘗て私が理想の中に描いて居た乃木將軍其人とは丸で違つて居つて、唯一言でも非常に優しみのある、乃木將軍は斯う云ふ方であつたのかと、實に意外の感に打たれたのであります、それから後色々な動機があつて、一と通りならぬ知遇を辱うするに至つたのでありますが、將軍としては所謂圓熟時代なので、隨つて私が承知して居ります乃木將軍には、奇行と云ふ樣な事は一つもない、其れ故今日私の申上げます事も、好奇心を以て聞かうと思はるゝ御方が御在りになつたならば、恐らくは失望に終られるでありませう、絢爛の極平淡に歸したとても申しませうか言はるゝ事でも行はれる事でも、決して軌道を外づれたといふ事は無かつたのであります、換言すると其の觀念は常識以上ではありますが常識以外では決してないのである、唯々餘人と同じ事を言はれるにしても、其一言一行一擧一動が非常に人を動かす力があつて、偉大なる感化を他に及ぼした、これは一に

誠心から出たゆへであつたと思ひます、私が海軍々令部員から當盤艦長に轉じました時の事である、東京を出立し旅順に向ひました、丁度其日の朝乃木將軍が告別の爲に來訪せられたのであります、其時に荊妻に向はれて、留守中は公けの事でも私の事でも、何でも心に掛り又身に思ひ餘つた事があるならば、遠慮なく御相談を願ひたり、出來るだけ何でも相談をして下さらば御力になりますと言はれた、是は別に不思議な事もないので、誰にしても自分の部下の者が轉じて行く時に、此位の事を言はるゝのは普通の辭令として、あるべきことであるのに、今日に至るまで、荊妻は其當時の事を言ひ出しては涙を流して居るのであります、斯の如く非常に感じて非常に難有く思つて居ると云ふものは、其言はれる事は餘の人と相違はないけれども誠心が籠つて眞實其人の事を思つて出るのであります から、同じ事を言ふのが非常に力があつて、さうして人を動かし、又人を服せしむる事と思ふのであります さう云ふ風に私が今日御話いたします事も、諸君が乃木將軍に親しく接せられて其行を見、其言を聽かれたなら、言ふべからざるの感動を受けられるでありませうが、それを私の言葉の上に寫し、又文章として御覽になると、言葉や文章を超絶したる將軍の人格といふものが現はれないから、存外平凡で普通の人と違つた事は餘りないと思はるゝでありませう、其積りて御聽を願ひたい

▲修養努力の活教訓

さて逸事を申し述べるに先だち一言いたしたいのは諸君も既に御承知でありませうが、乃木將軍は天禀の偉人と云ふよりも、修養の力によりて大成せられた方で、こゝが吾々にとりて無上の教訓だと思ふのであります、尤も、所謂無から有が出ると云ふ事は無いので勿論偉人たるの資質は持つて居られたに相違ないのでありませうが、例の殉死の當時黒岩先生が、「人と生れし神にぞありける」と言はれた如く、殆んど神格までの極點に達せられたのは、主として修養の力に因られ

たのであると自分は思ふのであります、天成の偉人は勿論尊敬すべきものであるし、又實に國の寶である、併しながら若し其偉人たる者が天成であつて、我々のやうな平凡な者が學んで達し得られないものとするならば、尊敬はするけれども、我々の修養の上には大した關係を有さないかと自分は思ふのであります、然るに之れに反しまして、若し修養の力を以て天性に打勝ち、遂に偉人になられた方があるならば、此の如き活教訓は無からうと私は考へて居るのであります、私は哲學や宗教の事は一向存じませぬけれども、聞く所によると、神道では天地同體とか神人同體とか言ふし、又佛教では生佛不二と云ふ事を主張するとのことである、就中佛教の人生觀の極致として一念三千なる事を云ふ、それを日蓮上人は事實上に現はして、事の一念三千と云ふ事を立てたと聞いて居ります、自分のやうな者が斯の如きことを申し上るのは、定めし片腹痛いと思はるゝでありませうが、此の一念三千と云ふことの要は、人間が只ハッと思ふ心の中にも、佛陀になる心もあれば、畜生になる心もあり、其他餓鬼にても、修羅にてもなる、心即ち所謂十界總てのものが含まれてある、言ひ換へれば天地萬有が、ハッと思ふ一念中に籠つて居る、それを一念三千と云ふと聞きかぢつて居ります、其中で最上のものは即ち佛性である、佛性といふと佛臭くなるが、佛とは眞理を覺れる聖、其聖になる種子が色々雜つてる中に存在して居る、之を向上發展せしめて、他の諸種を之に同化して仕舞ふのを成佛と云ひ、其種を本有の佛性と稱すると聞いて居ります、日蓮上人はあらゆる迫害に打ち勝ち、漁夫の子が一躍して上行菩薩たる事を示したのは、前述の次第を實證したのであるが、乃木將軍が修養の力を以て神格までに、完全に大成せられたと云ふことも、即ち哲學的人生觀の極致を實現せられたので、此上もない大教訓だと私は思ふので、將軍は實に吾々に向つて人間修養の力は、凡夫をして神佛の境界にまで達せしめ得るものだと云ふ實例を示されたのである

▲天性虚弱にして殆と失明

この事に關して大要を申し述べますと、皆さん方は既に乃木將軍を御覽になつたてありませうと思ひますが同將軍は、背も相應に高く、下腹部は張り出て居られたし、誠に立派な體格で、さうして如何にも丈夫さうに見えて居られた、又六十有餘の高齢を以て、或時は學生と一緒に水浴場へ行つて天幕生活をせられるし、平素も概ね學習院の寮に居られましたが、其寮といふのは三方襖子になつて居り、一方丈けが板戸になつて居る、或醫者は斯う云ふ事を云つて居りました、乃木將軍だからあれが耐えられるけれ共、他の人がアヽ云ふ部屋に住つて居つたならば、不斷に四方から色々なものが目に這入るので、始終根氣も心も使ひ減らして了つて、終には氣が違ふてあらうと、而して此の室は夏になると西日が差し込む、冬になりますと誠に粗末な板作りてありますから、根太板が透いて居つて、そこから風が吹き込むのてあります、其内に始終居られたのてありまして、如何にも丈夫な身體の樣に皆樣御考へてありませうが、何ぞ知らん乃木將軍の身體といふものは惡い所だらけなのてありました、先づ天性虚弱の上に左の眼は殆んど見えない、是は十七歳の時に擊劍をして居られる際竹刀の先が這入つたのださうて唯々眼が開いて居ると云ふだけて殆んど失明てありました、それから左の腋と右の足の尖は鐵砲て打貫かれて居られる、是は十年西南役の時に受けられた創てあります、それから耳は性來近い方てはなかつた上に、四十三年の遊泳に水が這入つて重い中耳炎に罹られた其後も充分に回復せられなかつた、それから齒は殆んど總てが入齒てあります、其上に激しい慢麻質斯を持つて居られた、それて能く寮に居られても、嚴寒の折などには毎日手拭て鉢卷をして居られる、定めて風ても引かれたのてあらうと我々は思つて居りました、處がさうてなくて、醫者の說を聞くと、慢麻質斯が激しくなると必ず頭痛を伴うて來る、少しく氣候の變化てもあると、其度に起る、卽ち將軍のは風邪てはなくして、慢麻質斯の激しい爲に頭痛が起るのてあると言つて居りました、又是は誠に申し兼ねる話てありますが

酷い痔を持つて居られまして、少しく遠路てもすると痛んて來ると云ふ位てあります、先づ此處に擧げましただけても七ッの病を持つて居られたのてあります、それは修養の力と忍耐の力とを以て押し通し、天性の虚弱に打勝つて行かれたのてあります

次に更に將軍の性質に付て申しませうが、將軍と友達と云ふよりは、寧ろ先輩とも云ふべき人に日原素平と云ふ方があります、山口縣長府の方て、今年七十八になられ、乃木將軍より十幾歳の年長者てあります、此方が初て將軍に鐵砲の擊方を敎へたのださうてあります、が、此人の話に、將軍は生來非常に氣が弱かつたと云ふことてある、一體將軍の阿兄さんが二人まて早世せられたが爲に、家族は反對の名を附けると其子供が育つと云ふ諺に因みて、將軍に無人と云ふ名を附けられた、斯うしたならば却て育つてあらうといふのてあるが、其將軍が幼い時餘り泣かるゝので、同じ長屋に住んて居た近所の者が非常に迷惑をして、あれは泣人だと云ふたとの事てある、又同輩の子供と遊んても何時ても苛められる、甚だしきになると毛利家へ出入する商人の子供にまて苛められるので、令妹が非常にそれを殘念に思つて、或時一人の商人の子供の後から飛び上つて、彼の頭を撲つたと云ふやうな話も有つたと聞いて居ります、又將軍自身の口からも同じやうな事を私は屢々承つたこともあります、かくの如く身體は虚弱てあり、又性質は誠に氣の弱かつた方が、御兩親の敎育と師の嚴格なる指導と、第一は自己の修養力から漸次向上大成せられて、偉人となられた方てあります、かくの如き氣の弱い方てあつたものて、御兩親も大變心配せられまして、丁度將軍が十歳前後の時代に、父上が江戸から國に歸られることになつた時、歸着後生首の曝らしてある野原へ將軍を連れて行かれて、其近傍をグル〳〵觀せられた、其時には將軍は顏の色まて變へ、口も利けない位に驚いて居られたさうてあるが、嚴格なる父上の方が更に恐しかつたものと見えて、我慢して歸つて來られると、母上が大きな握飯を拵へて、其握飯に梅干の赤い汁を塗り付けて、宛

も今見て來た首の血潮に塗れて轉がつて居るやうな物を拵へて、サア喰べろと云つて喰べさす、さう云ふ樣に御兩親共に全力を傾けて、精神的にも肉体的にも、向上する樣にと導かれるし、一方では玉木と云ふ先生が亦非常に嚴格な教育を施された、之に自己の修養力が加つて、御承知の樣な方となられた、之が最も大切な點で、教育に當られる方々の忘るべからざることだと思ふのであります

▲敬虔の念を重んず

是から學習院に於ける逸事二三を御話いたしまする、其前に申上て置きたいのは——是はもう勿論申すまでもない事でありますけれども——學習院御在學の　殿下方に對し奉る將軍のお覺悟であります、既に前にも申上げました如く、四十三年に中耳炎で赤十字病院へ這入つて居られる時には身體をチョッと動しても非常に痛むといふ有樣であつたのでありますが、教授等が病院に參りまして色々な話をする時、談苟くも　殿下方の上に忍ぶ時には先づ「待て」と斯う言て置かれてさて夫人に扶けられて其ベッドの上に起き上つて、正座してそれからでなくては決して聽聞せられない、如何なる痛みの時でもその通りて、此の一事のみを以ても、將軍の觀念のある所が明瞭であると思ひます

一體乃木將軍は、學生特に幼い生徒に向つては、非常に優しいのであります、が併し、言葉と禮儀、此の二つ丈けは吳々も家庭に於て指導するやうにといふ事を屢々父兄懇話會の時申されたのであります、敬虔の念と云ふ事を非常に大事に思つて居られました、　殿下方の御指導に付きましても、現に學習院には男子部には中學から小學を通じて、　皇太子殿下を始め奉り御十三方御出で遊ばされ、女子部には御十方合せて二十餘名の　殿下方をお預りになつて居られたのであります、其御一擧御一動に至るまで、嚴密に御注意申上げられました、それでチョッと拜謁される時にも、御目の着け處は如何である、御體容は如何であるといふ事等を拜察されて、申し上げやうと思ふやうなこととて

もある際には、直ちに御前へ進まれ、是はかく〳〵遊ばさねば不可ませぬ、と申上げられる、其言語態度といふものは、私共御側で拜見して居りまして、歷史の上に見る昔の忠臣が幼君を輔佐し奉るのは、左も斯うであつたらうと思つて、其都度言ふ可らざる感慨に打たれたのであります

▲相對調和

次ぎに申上げて置きたいのは、乃木將軍は前にも申上げた通り、總ての事が誠心から出るので、是は今は申上げても宜しいと思ひますが、新聞なり雜誌なりに、義僕とか孝子とか節婦とかいふやうな事が出ますと、必ず或方面から見舞はれ、金員でも惠まれる、將軍が廣兵院へ能く行かれたことは知つて居られる人が多いが、單に廣兵院ばかりではないのであります

義僕であるとか節婦であるとか、或は孝子であるといふやうなものがあることを知られると、自分は少しも形を現はさないで、或方法を用ゐて必ず多少の助力を與へて居られたのであります、さう云ふ風に誠心から何事でも出ると云ふ爲めであります、乃木將軍の行動は非常に相對調和といふ結果を現はして居る、是は實に大切な事と思ひます、例へて見ますると、一昨年依仁親王殿下に隨ひ奉つて英吉利へ行かれましたが彼地から歸られて向ふの話をせられる時に、私は益々敬慕の念を深うしたのであります、それは私も色々外國へ行つて見ました人の話も聞きましたけれども、兎角どちらかに偏する、悲觀する人は非常に悲觀して仕舞ふ、又心醉する人は無暗に心醉して、何でも歐羅巴て無ければならぬと言ふ、昔、漢學に大變凝つて居る人が有つて、本郷から品川へ引越した時に、孔子樣の國へ二里近くなつたと言つて喜んだといふ話がありますが、さう云ふ風に何でも歐羅巴を有難く思つて來る人と、又何でも不可いと悲觀して來る人とあるどちらかに偏するのに、將軍の觀察せられて私共へ教訓せられた事は、向ふの長所は長所と見られて、而かも我本領を沒却しないで彼の長所を採らねばならぬと

云ふ事を、始終言はれた、又斯う云ふ事がある、餘程是は大事な事であるが、外國人は日本人の所謂大和魂或は武士道といふ事を熱心に研究して居る、どうかして之に倣ひたい、それを理解したいと研究して居るが萬一にも此方では之れに反して、先方の長所を採らず唯々惡い處ばかり採りて、或は「邪」な思想に染まり、或は贅澤品を輸入すると云ふやうなことになつたなら國家の憂之れより大なるものはないと云ふ事を始終言つて居られた

其他にも種々教訓がありました、又朝に在つて野を忘れず、野に在つて朝を忘れずと云ふのが、乃木將軍の本領であつたと思ひます、丁度昨年の二月の初めてございましたが、靜岡の師範學校に木劍體操があるといふのを聞かれ、同月二日の朝てございました、私が海軍々令部に居りますると、將軍が見えて、どうだ、今日用が有るかと言はれる、別段用は有りませぬと申しました、それぢや今夜の一時に新橋發の滊車で立つて滊車の中で寝て朝靜岡へ着いて、師範學校の木劍體操を見て來やう、一緒に往かないかと云ふ事てありました、それから御供をしませうと言つて隨行し、翌日師範學校を視察しまして、それから沼津へ參りまして、皇后陛下の御機嫌を伺ふことになりましたが、其滊車の内で一々田畑の作物を指して色々な教訓を受けたのてあります、其中に斯う云ふ事を言はれた、「此農家として最も大切な時は麥を収める時と、蠶の出來上る時て、麥ならば約一週間、蠶ならば五六日と云ふ所が大事な所てあるから、さう云ふやうな時に充分農家の人々が力を注ぎ得るやうに、當局者は考へて行かねばならぬ、こう云ふ樣な事は貴下方は能く考へて置きなさい」と斯う言はれました、又或時學習院の或生徒が食事の時に御飯の中に何か汚ないものが這入つて居たと見えて、突然立つて窓から捨たのてあります、さうすると食事を仕舞ふと將軍が、其學生を暫くお待ちと呼び止めて「農家に於て米を取ることは如何に苦心慘憺てあるかと云ふことを話して、若し中に汚い物があつて食べられないとするならば、それを茶碗の蓋の上

に取り除けて置くがよい、それを外へ捨てるやうなことをすると、自然と同情といふことが薄くなつてくるぞ」と云つて、懇々戒められたことがあります、斯くの如く凡て誠心から出るのてありますが、其結果將軍の思想は相對調和と云ふことになつて居る、譬へば國家と個人の調和、理想と實際の調和、理性と情誼との調和となつて顯はれて居る、現今出版せられて居る種々の書籍を御覽になつてもお分りになりますが、乃木將軍は一面に於て非常に温い、慈悲深い方てあられたと同時に、一面に於ては、大義名分或は信義と云ふやうなことに付いては非常に嚴格て、苟も之に反するやうな事は決して許さなかつたのてあります、而かも寛嚴宜を得て居るこれも一つの相對調和てある、又總ての事に付いて將軍の觀察は、常人の觀察よりは必ず一段深い所に着眼せられる、例へば此處に一人の恩人に背き、或は世間を毒する罪人があつて、其事が新聞に出ると、吾々は直に其の罪人は惡い奴だ、恩人に背いた實に甚い奴だと、痛罵し去つて仕舞ふと、將軍はマア待ちなさい、さう評をするものてない、どうして此の者が斯ういふ罪を犯すやうになつたらうか、と云ふことを考へてやるがよろしい、而して出來得べくんば何とかして之を善化指導してやりたいとの觀念を、持つ程の仁慈の心がなければなか〳〵人の上に立つことは出來ぬ、只一圖に罪を犯したから其人を惡むといふやうてはいかぬ、寧ろ憐んてやれと云ふのが將軍の觀念で、其慈悲心は殆んど神佛に等しいのてあります

▲將軍の半面は温厚の長者也

これからお話しますのは、主として學習院の教職員、學生或は小使等の、將軍に對する觀察をお話しいたします、第一小使の觀察を申しませう、將軍が始めて學習院の寮に來られましたのが、四十一年の九月と聞いて居ります、私共は其時分にはまだ一面識がなかつたのてあります、始めて寮が出來て將軍が來られた時に院長官舍と云ふものがありましたが、それは　殿下方

の御休息所に充て、總寮部といふ先程お話をしました三方ガラスになつて、さうして一方が板戸になつて居る、其所を會議室兼將軍の書見てもせられる所に充て其次の室をテーブルでも置く所に充て、其次を寢室に充てる、即ち三室取つてあつたそうであります、スルと將軍が來られて、これは多過ぎる、二室で澤山だ、其一番終いの室は副寮長の部屋に充るが宜い、自分は會議室と次の室の二室で宜いといはれた、スルと、まだ九月でありますから蚊が出る、蚊屋の釣手等は總て第三の室にあります、第二の室にはありませぬから、小使がどうしても第三の室にお休寢を願はなければ困りますと云ふと、イヤそれは私に工夫があると云つて小使に向のベッドの一方を持たせて、御自分で一方を持たれて、第三の室から第二の室にベッドを運ばれ、ベッドの枕元に衝立を立て、其の衝立の上に鉤があつた、そこへ蚊帳の一方の釣手を掛けて、下の方が斜になつて床にクッ附いて居つて、顔の所丈けが持ち上つて居る、そうしてそれから、蚊鐘と別に洗面用の水を用意させられた、又學生に對するに一方に於ては、無味い物でも何んでも學生に食べさせるといふ習慣を養はれると同時に、一方に於ては、衛生に害のあることは非常に嚴しく言はれた、一例を擧げますと、寮中の食事にライスカレーが出來たことがある、將軍は先の献立を見られてこれはいけない、少年の腦を刺戟するからライスカレーは食べさせぬがよいと言はれた、其位用意が周到であります、それから寢具も自分で疊まれる、初めはそれを知らぬから、將軍が朝起きられて便所に行かれた留守に、小使が這入つて片付て仕舞つた、すると驚て來られて、これはいけない、人の寢室に勝手に這入るものではない、又寢具は自分で片附けるから、片付て貰ふ時には此方から言ふから、云はない時は片付てはならないと言はれたと、其小使が始終話をしました、それが濟みまして、それから各寮を見廻られて、學生が如何なることをして居るか、又少し雨でも降つて濕氣がある樣な時に窓を開けて居るものがあると、衛生に害があるから締めろと言つて締めさ

せられる、夫から、鐘を以て院内を始終見廻つて歩かれ時に栗でも落ちて居ると栗を拾つて來られて、それを無邪氣に机の上に並べられ、小使でも這入つて來ると、此栗をお前にやらう、併し生で食べては毒であるから、焼くなり煮るなりして食べろと云つて遣られるのであります、曾て旅順砲撃軍の司令官としてあの猛烈な戰をせられた將軍が、學習院長としてはかゝる溫厚の長者であられたのであります、併し逸話と申しましても決して奇を衒ふと云ふやうなことはないのであります、これを翫味せられたなら其中に云ふ可らざる教訓が含まれて居ると思ふのである

又或時幼年部の一人の學生が院長の留守に紙鳶を擧げた、其紙鳶が丁度將軍の居られます總寮部の前の電線に引掛つて取れなかつた、それを一生懸命になつて取らうとして居るところへ、將軍が軍事參議會の會議か何んかに出られて歸つて來られたから、定めし叱られると思つて居ると、將軍は完爾とせられて吃驚りするには及ばぬ、私が取てやろうと云ふて餘所から棹を持て來て一生懸命に取つて居る、どうしても取れない。其内に高等科の學生が一人通り掛つた、それを呼止めて、お前も手傳つて紙鳶を取つてやれと、今度は二人でそれを取らうとしたがどうしても取れない、それから又長い棹を持て來て、三十分も掛つてやう〳〵取てやり、其學生が紙鳶を以てニコ〳〵して行くのを見てさも嬉しげに見送られたといふ話があります、實に諧謔と云ひ趣味と云ひ、大將の軍服を着た老將軍が、少年の爲に棹を以て一心に紙鳶を取て居られる圖は、これを詩題としても亦書題としても、言ふ可らざるの趣味を喚起するではありませんか

▲人の親切を無にせず

それから新う言ふ話がある、前に申しました通り將軍は中耳炎を煩はれて後は、身體が何となく衰へられたのでありますが、それにも拘はらず撃劍の寒稽古を一度も休まれない程撃劍には熱心であつた、それで今日の一年祭にも追悼式を擧行し、目白の高等科中學校で

は、式が終りました後に擊劍と柔道の試合體操をしたのであります、此の擊劍及木劍體操といふのが將軍の始終念頭に置かれたことなので、殊に木劍體操に付て將軍は斯ういふ事を云はれた、英吉利から歸つて來られてから後であります、日本には固有の擊劍といふものがあるから、これを應用して一面には武士道觀念を養ふの資に供し、一面には體育にもなるやうに何とか工風して見たいと言つて居られた、其内にさう云ふ事をやつて居る學校があるといふことを聞かれた、從來、善いことを聞かれると直ぐ研究すると云ふのが將軍の主義であります、少しも猶豫しない、そこで第一番に四谷小學校に參觀に行かれ私も同行しました、尋で麻布の小學校に行き、靜岡に行き、或は大阪に行き諸方を研究されて、彼れ是れ折中せられて實行されたのが、現に學習院初等科に行はれて居る木劍體操であります、是は昨年四月から實行したので、其の初めの日一方には拵へ付きの刀を置き、一方には木劍を並べて、さて將軍は昔の武士が刀に對する觀念の如何に敬虔の念に滿ち、如何にこれを尊重したかといふことを諄々と話されて、さうしてこれは本劍であるが、これを木劍とは思ふなよ、昔しの武士が刀を大切に取扱かつたと同じ觀念を以て、取級へよと言はれたのであります、てあるから學生の中に木劍體操が濟んだ後にそれを投り出したりなどする者があると、其學生に向はれ、お前の考へは違つて居る、これを木劍と思つては違ふ、自分がいつか話した樣に、昔の武士が刀と云ふものに對し、如何に尊敬を拂つて居つたかと云ふことを考へて取扱はなければいかぬと言はれて、木劍體操の時に、一々姿勢から目の着け所を直された、昨年私が旅順に參つて居る間に寄越された手紙にも、毎々木劍體操の經過の模樣を記されて居つた、其位念頭に懸けて居られたのであります、又擊劍もさうであります、中耳炎を疾まれた後は、青年部の學生と打合うのは宜くないと醫師が言はれましたので、それだけは止められて、以來は少年の學生を相手にせられたが、謹が面會に來て居らうが、如何なる會議があらうが、其時になると一寸失禮すると言つて出られて、一時間な

り一時間半なり學生を相手にして教へられて、再び會議に列するといふ位熱心でありました、從つて寒稽古を一日も休まれぬ、さうして又自室のストーブを焚かない、學生の方には蒸氣が通つて居るが、將軍の居室にはストーブが置いてある、それを焚かせない、前に申しました通り根太板が薄くて隙がありますから、吹上げて來る風と云ふものが、極寒の時には堪へられない、そこで將軍は椅子に寄られ、膝の上に毛布を卷かれて齒切りをして我慢をして居られた、教職員の人々は非常にそれを心配して居つたから、私は無遠慮に平素の知遇に委せて將軍に忠告したのであります、すると將軍は依然として焚かれないで、毛布を卷いて居られる、或時私が不意に其室に這入つて行くと、將軍は慌ててストーブの中に石炭を入れて、私が何とも云はぬのに今丁度火が消えたと云はれたが、斯の如く人の親切を無にしないといふ考へを持つて居られた、私は其時に將軍が慌ててストーブへ石炭を煙べられる其樣子を見ました、思はず胸が塞がつた、今日斯う云ふことをお話しするのも、モウ一つの昔語りとなりまして言ふ可らざる感慨に打たれるのであります

▲讀書は將軍の主なる樂み也

それから將軍が赤十字病院に入院中のことであります、初等科の生徒が將軍に見舞狀を差出したいと云ふことを教員に頼んで來た、當時將軍の中耳炎も治り掛けて來たものでありますから、モウ見舞狀を出しても宜からうとのことで、十名位ゾ、二度に分けて出した、將軍はそれを一々見られて、昔から用ゐ來つた返りを間違つて使つて居る所や、字違ひや假名違ひを一々直して返された、一體將軍は、非常に本を讀むことが早い方であります、大概千何頁といふ本を十數日で讀んで仕舞ふ、讀まれゝば必ず誤字等を正される、又意見があればそれを加へる、此の席にも有馬文學士が居られますが、學習院の教授で其邊の事はよく知つて居られますが、如何なる雜誌でも飽未な本でも、寄贈を受けたものは必ず目を通さぬことはない、目を通し

たならば必ずそれに間違でもあれば其間違を正し、將軍自身の意見に合はなければ其理由を記入される、又會心の語でもあると喜んで愉快な評を書かれる、どんな詰らぬ雜誌でも、受取つたものは棚に投つて置くやうなことはなかつた、それから音讀されるのが將軍の癖であります、尤も學習院では學生の溫習時間には音讀を禁じられて居りますが、將軍の自室では差支ないことになつて居るもので、時には朗々と音讀せられることがあつた、教職員始め私共まで今でも其窓下を通ると、ともすると其聲が聞える樣な心持がするのであります、どう云ふ譯で音讀をせられるかと云ふと、音讀には二ッの利益がある、一ッは自分の觀念に入れ一ッは自分の聲が自分の耳に這入つて、人から讀んで聞かされる樣に、二度一ッ事を研究する樣な利益があるから、音讀はよいものであると言はれた、實に讀書は將軍の娯樂の主なるもので、曾て狂歌を作られた中にも、擊劍と朝飯と讀書を三ッの樂しみに數へて居られます

▲嚴格で慈悲深く且洒脫也

前々より申した如く、將軍は一方では非常に嚴格でありまして、或點に至ると、苟も許されなかつたのでありましたけれど、一方に於ては非常に慈悲深いと共に更に洒脫な方でありまして時々面白い話をされる、時に笑はざるを得ない樣な話をされる、曾て片瀨の水泳所で天幕の中に居られた際、或學生が參りますと、君等に落し話をしやうと言うて、かう云ふ話をせられたと云ふことがある、或所に鶴を描くことの大變巧い書工があつて、鶴を描くことは自分に限ると云ふて得意であつた、所が其弟子が始終先生の側に居つて一を見て、成程先生の描く鶴は巧い、自分もどうかしてアヽ云ふ風に描きたい、それにしては寫生をする必要があると思つて、或時田の畔に行て待つて居ると、一羽の鶴が下りた、其時に鶴を見ると先生の描くのとは大分違つて居る、それを寫して來て、先生あなたは鶴を描く事は名人と思つて居ましたが、今實物を見ますると

大分違つて居ります、これはどういふものでありませうと云つたら、イヤお前の見た鶴の方が未熟なのだと言はれた、己惚も此所迄至ると一種の面白味があると言はれたさうです、それから又斯う云ふ話をされた、或國の王樣が病氣をした、其國の侍醫だけでは心細いので、他國からも醫者を呼ばれた、其醫者の名前はマッケンジーと云ふ醫者であつた、さて診察の結果手術をやらなければいけないと云ふと、其國の醫者は、他國の醫者がそんなことを言つたつて、手術をしなくても宜いと言つて議論になつた、どつちが勝つたらう、此所迄話せば分るだらうと云ふて、大笑せられた、思ふに、マッケンジーと云ふ名だから、其方が勝つたと云ふ落ちなのでありませう、又或時、軍事參議會か何かとあるので忙しい時に目白の學習院の官舍を出て、停車場に行かうとせられた時に某學生と一所になられた、目白停車場に行くには踏切を越えて行くのでありますが、其踏切迄來ると電車が來たので、將軍は通行券を持つて居られたので、番人に聞いて見られた所が宜しうございますから此の中をお通りなさいと言つたので、急ぎの用であつたから線路を通つて電車に乘られた、さうすると其學生は普通の道を通つて切符を買つて乘らなければならぬから、外を廻つて行くと聞に合はず、將軍だけ行つて仕舞つた、すると其晩將軍は其寮で學生を集めて、かう云はれた、自分は今日實に濟まない事をした、自分が急いで居つた爲めに、番人が宜しうございますと云つたのにッイ釣込まれて、線路を駈けて行つて乘つた、然るに學生は外側を廻つてちやんと乘つた、それは實に學生の方が正しい、番人は宜いと云ふ權利はない、若し此の際驛長からでも何故あなたはこんな危險を犯しなさいましたと言はれた時は、番人が宜いと云つたから來たといふことは言ひ譯にならぬ、誠に武士として不たしなみのことであつた、恥を掻かなければならない所であつた、學生は外を廻つて行つた、自分は其學生に及ばなかつた事を謝さねばならぬ、人間といふ者はどうかすると、不圖人の言葉に釣込まれて、横道に這入り易いものであるか

ら能く氣をつけねばならぬと、訓戒を垂れられたことがある、是等は實に眞ふ可き話と思ふのであります、斯う云ふお話はまだ澤山あるが限りがないから、今一ッ二ッで止めます、將軍は總てのことに慈悲と云ふことが行渡つて居る、水一滴でも紙一枚でも、これを麁末にすると云ふことをせられない、又一本の木一枝の花に對しても、深い〳〵同情を持て居られた、これも片瀬の遊泳中の話でありますが、或幼年の學生が河原撫子の花を取て、おもちやにして捨てた、それを將軍が見て、其學生に向はれ、無暗に花を捨てるものてはない、それを取つて花活にても入れて樂しむと云ふのならば宜しいが、無益にちぎつて捨るものてない、此の花については古來幾多の詩人歌人が、詩歌にも作つて居る、天の時を得て此處に咲き出したのてあるからこれを取て無益にちぎつて捨てると云ふのは、誠に無慈悲てあるから、さう云ふことはしないが宜しいと言はれた、一木一草に對するにも同情が斯くの如く深かつたのてあります

まだ外に澤山お話する事がありますが、丁度一時間と言ふお約束の時間になりましたから、これて講演を止めますが、終りに臨み申したいのは、昨年將軍の亮去せられたのは、私は、肉に死んて靈に生きられたものと思ひます、將軍の死は決して死に非ずして、所謂方便として涅槃を現はすといふのてあつて、將軍の肉に死なれたと云ふ事が寧ろ靈として千萬年に活現し、以て此の皇國を守護せらるゝことゝ信じて居ります、尚一つまだ世間に知られて居りませぬ將軍の歌を、御紹介致しませう、これは將軍が熱海と修善寺の間の弦卷山といふ所を通られた時、詠ぜられたものてあります

あなたふと弦卷山の朝けしき
東に旭西に富士ケ根

如何にも雄大てあつて、又崇高て、此の歌は直ちに移して將軍の人格を想はしめる、此歌を以て今日の講話の終りと致します

感恩と成功

辯護士　吉田珍雄

近來成功と云ふ語が流行する、けれども懷手をして居つて誰れても成功するてあらうか、唯だ浮つ調子て時間を送つて居つて、決して成功を見るべきものてない、成功には適當の要素がある、其の要件を欠いては志望を達し得られるものてない、金錢のみを目的として精神が腐つて居つては駄目てある、精神の修養が足りないと失敗に終る、必ず道德なり宗教なりの權威を認め、而して其仕事に精力を盡さねばならぬ

世の多くの雇人なるものは、他の資本主の事業に參與しながら、漫りに人の品格を傷くる樣な批評を敢てし、又幾許働いても自分の爲にはならぬなどゝ僻んで横着なる根性を起し、表裏の行爲があつて、人の監視がないとすれば手を拱ねて時間を送ると云ふ事實を見るのてあるが、修養の足らぬものは多くはこの一類てある、之は佛教に說いてある三毒の中の愚痴の煩惱に外ならぬ、愚痴の煩惱は光明ある進路を塞ぐものて、この雲に鎖されたものは前途に新天地を開拓することが出來ぬ、法華經の普門品を拜すると、還着於本人と云ふ事がある、それは人に咒詛れたり毒藥を盛られたりするとき、至心に觀音を念ずれば咒詛れた人は無事てあつて、反て人を咒つた自身が其災厄に罹ると云ふ因果的法則を明示して居るのてある、假し自身か因緣の然らしむる所として雇人たる地位にあらうとも、得る所の報酬は少なくして自己の慾望を滿たすに足らずして、働き甲斐がない樣に考へる點があらうにせよ、その誠意を籠めて忠實に努力するものあらば、主人の

眼には之を認むるの力なくとも、神佛は常に之を知見照覽して居るので、何れの日にか其報ひは廻り來るものである、而し神佛が照覽すると言つても、現實に物質の幸福を授け給ふ譯てはない、或他の力を假りて幸福を授くるのである、宗教は神秘的交渉であつて、直ちに人間の眼には見えないけれども、人の善行美德は神佛之を嘉納することは言ふまてもない、唯だ人の注意のみを標準として働く場合は、骨休みをしたり人目を掠め樣とすることになる、そうなれば如何に優さしい主人でも、遂に怒りて信用を措かないことになるであらう、又他に雇はれんとしても使ふ人もない譯になる、之が卽ち神佛に見放されたと云ふのてある、然るに主人の事業てあつても自己の創意の事業の如く、刻苦精勵忠實に働くならば、雇主も其德に感ぜざるものはなからう、假令雇主の修養が足らずして打ち捨てゝ置いても、他の人は其勤勉振りに尊敬を表することになるのてあります、又宗教上の方面などに就ては、稍や信心氣はあつたにしても、徒らに不動さんへ百度參りをしたり寒氣などして、自己の立身出世を願つたからとて、日々の働作に於て忠實を缺いて居つては、神や佛の救濟のあらう筈がない、雇人根性を出して不眞面目な事をするならば、因果律によりて其罰は自分の頭上にふりかゝつて來る、商業上でも唯だ一時の利益を得んとして、道德の規律を蹂躙するの行爲があらば法律上の制裁は受くることがなくとも、良心の呵責と世間の信用を失墜することは理の然らしむる所である、鹽原太助の言葉に稼げば商賣の繁昌せぬ試しなしと云ふことがあるけれども、眞にその通りて、孝經には已の親を大事と思はゞ先づ人の親を大事にせよとある、いかに自分の親に孝行を盡さうとしても、他人の親に對して一片の同情だもなければ、眞實の孝行道德を全ふすることは出來ぬ、單純なる利己主義てはいかぬ、自分の行爲の上には利他を含まねばならぬ、商業道德上、雇人根性は大禁物てある、一時を糊塗する思想は努等なる人格て、自己の將來の天地に光明がない、自己の現在の思想の發動が一歩誤まると、將來發

展の進路を塞ぐことになる、この雇人根性は誠ひべく亦恐るべき思想てある、固より商工業は利益を主として立つべきものてはあるが、人間相互の道德規律は嚴守せねばならぬ、卽ち商業道德を實踐することが肝要てある、曾て予の同藩士に鈴木主計と云ふ人があつた、此人の知行は五百石て、若黨仲間草履取など十餘人も召使つて、藩中ても屈々の家柄の人てあつたが、廢藩置縣の際碌石を奉還し、自宅の長屋門を修繕して呉服店を開いた、而して彼は手拭一本を求めに來た人ても最と叮寧に挨拶して而かも品物の價格は低廉て、少しも暴利を貪る樣の事なく、士族の商法家として實に珍らしき遣り方てあつたが、或日予は其人に對ひ僅かの花客にまて平身低頭するやと尋ねた、同氏は慨然として云ふよう、我々は若干の祿石を頂いて主君の爲に赤誠を致したのてあるけれども、今は一商人てある、三厘五厘にても商賣上利益を興へて呉れる人こそ、自分の大切なる主人てある、其人に對してどうして缺禮が出來るものかはと言はれたが、予は當時一言もなかつたことがある、之等の事は些々たる實歷談てはあるが、能く知恩報恩の道を辨へて居るもので、眞に商業道德を實踐せる人と云はねばならぬ、斯かる心懸の人は天の加護をうけて成功する、成功とは財產の殖えたのを言ふのてはない、財產の殖えたのも成功の一部分てはあるけれども、其事業に對する初志が、あらゆる困難と戰つて遂に達し得た場合、それが所謂成功て、成功の道程には感恩道德の實踐を要件とする、日蓮上人の訓誡を拜するに

夫老狐は塚をあとにせず、白龜は毛寶が恩をほうず
畜生すらかくのごとし、いわうや人倫をや

と懇說せられて居るが、此の報恩的思想が尤も大事てある、人として知恩報恩の觀念及其實行がなければ、崇高なる品格を鍛え上げることが出來ない、この思想の修養と實行とは、特に雇人たるの時に於て訓練を積むことを得ば、必然に人格は向上して、そこに社會的信用を獲ることになる、信用は商業上の大資本てある、無限の靈寶てある、金錢を以て償ひ得ないほどの

實である、さうして此の信用や、或る事業に必要なりとて直ちに作り得べきものでなく、多年の實踐道德の賜物として、自然の間に人格の一要素として備はるものである、佛敎には六恩と稱し、父母の恩、衆生の恩、國の恩、主人の恩、師匠の恩、三寶の恩が說かれて居る、吾々は現に共存生活を營んで居るのであるから、衆生の恩と云ふ事を忘れることは出來ぬ、衆生の恩とは共同生活上に於ける感恩である、感恩の思想が養はれると雇人根性は起らぬ、商業道德は行はれる樣になる、縱令年期奉公して居る小僧さんでも、其仕事に誠心が加はれば必ず光りが表はれる、誠心は一番尊い、誠心を盡した仕事の中には、信用の力があるから成功すること疑ひない、卽ち自己の將來の運命を開拓することになるのである、願はくは世の實業青年は、歲の改まると共に愚痴の煩惱たる雇人根性を退けて成功の秘法たる感恩の念を强めることが大事であると思ふ

大正甲寅開歲日酒餘率賦亦聊言志爾

開成中學敎頭　石田羊一郎

天皇登祚第三年。元日祝釐忻盎然。
赫々威稜被后土。下民小德流如川。

代議士　板倉中

君が代のさかゑを三輪のみやしろに
いくちよかけてしける大杉

大倉正　錦織日航

かすかりの世をいのらすと神まふて
社をまとふ杉ぞゆかしき

倉正　野口日主

五十鈴川流れにうつる神杉は
我日の本の柱なりけり

山名日象

ひれふして君が八千代をいのるなり
伊勢のみ社神杉の森

開結二經の研究（一）

井村日咸

法華三部の中、序分の無量義經を開經と云ひ、流通分の觀普賢經を結經と云ふので、此二經は何れも一卷づゝて四十餘紙に過きない小部の經文でありますが、此二經の中には、宗敎上の重要の敎義が整備して說明されてあつて、簡にして要を得たる事は、餘り他に類を見ないのであります、而も之れが佛敎敎義の中に於て最も勝れたる方面を發揮して居るのでありまして、これに法華經迹門の敎法統一の理想と、本門の顯本遠壽の生命とを與へましたならば、最も完全なる佛敎敎義と相成るものと信じます、正宗分たる法華經は、無論完全の敎義を說明致して居るのでありますが、何分八卷二十八品の廣文でありますから、初心の者には廣漠にして其要領を得る事は甚だ困難でありますから、寧ろ此開結二經に依つて、佛敎敎義の大要を得ることの容易なるに如かざるを思ふて、此二經の研究を試みた次第であります、素より淺學なり充分の參考書をも持ちませぬ故、到底完全なる研究と申す事は出來ないのでありますが、諸氏の御參考の一助とも相成らば幸と存じて、聊か申述べて見樣と思ふのであります、先づ開經より御話を致します

▲無量義經

【翻譯の年時】

此經は一卷四十七紙で、三品に分れて居ります、翻譯せられたのは支那南北對立の時で、齊の高帝建元三年（西曆四百八十一年）、廣州の朝庭寺に於て、曇摩伽

耶陀舎の譯出せるもので、法華經の翻譯より七十七年後れて居ります、そして翻譯後直に廣布せられずして數年を經過し、永明三年に至りて、武當の惠表比丘初めて之を傳受し揚都に齎しきたつて廣く世に流布せしめたと云ふことであります、左樣な次第で從來法華經を請ずるものが、其經首に載せられたる、無量義經を說き給ふと云へる丈に至つて解釋に苦んだのが、始めて茲に至つて解決せられたので大變に喜ばれたと云ふことを傳へて居ります、此時の譯經が現存の無量義でありますが、外に別譯が一本あつたと傳へられて居りますが今は傳つて居りません、又此經の註釋として、劉順居士と云ふ人(天台已前の人なり)『註無量義經』と云ふがあつたことは文句記に見へて居りますが、現本は無い樣であります、今は傳敎大師の『註無量義經』がある計りの樣であります、次に此經と

▲法華經との關係

を申しますれば、此經は法華經の序分であり、開經であることは前に申したのでありますが、何故にソー認め得るかと云ふに、法華經の序品の中に(給園法華經五三頁)爾時世尊四衆圍繞供養恭敬尊重讚歎爲諸菩薩大乘經名無量義敎菩薩法佛所護念」無量義經を說き給ひしを明す『佛說此經已結跏趺坐入無量義處三昧身心不動』無量義經を說き已つて三昧(禪定)に入り給ふ、將に法華經を說かんとして、先づ衆生を驚覺せんがために、此土他土の六瑞を現し給ふ、即ち經に『是時天雨曼陀羅華』等と云ふて、經文に其有樣を委しく說かれてありますが、此經文に依つて、此經と法華經とは接續して、御說きに成つたことは明了であります、又此經の中に『四十餘年未顯眞實(一給園頁)と說て、權實の榜爾を示して、分裂せる諸法は其義にあらず、無量義は一法より生ず、一法の根源より諸法は發生したるものにして、此一法のみ眞意なりと明して其演繹的方面を說いて、歸納的開顯統一の敎義を顯示するの前提と爲されたことは既に此經が法華經の開經たり、序分たる所以であります、此意味を以つて此經を開經とし

法華經を合經と釋せられた場合もあります、經文の上に顯はれた處でも其敎義から言ふても此經と法華經と接續して說き給ふたことは疑のない處であります、次に佛敎敎義上に於ける價値を申上げねばならぬのであります、それには先づ此經全體の大要を御話致さねば相成りません、依つて

▲各品の大要

を簡單に申上げます、第一は德行品であります、此は初めに諸經の通序に倣ふて、所聞の法體『是』能持の人『我聞』所說の時『一時』能說の人『佛』所說の所『住王舍城耆闍崛山中』同聞の衆『與大比丘衆萬二千人等』を擧げてあります、而して重ねて列座聖衆の中に、菩薩比丘の名を列ね、德行を叙述して因位諸聖の諸德を讚歎致して有ます、此は經家(此經の結集者)の言であります、而して其列座の聖衆は、佛陀の德を讚歎し奉らんとして、讚佛の偈を述べ給ふ、此偈は果位の佛陀の諸德を讚歎致しましたので、前に因位諸聖の諸德を歎美したのと、因果互に擧げて、其德行の圓滿なるを稱歎せられたのは、經宗の善法であらうと思ふのであります、第二の說法品には、佛陀所說の敎法に就て、其根源必一ならざるべからざるを論じて、無量義は一法より生ずるものなるを明し、又更に佛陀所說の言辭は初中後の說文辭一なりと雖ども、而も其義別異なることを明し、其別異なる所以は、衆生の根性差別するに依る、衆生の根性に從ふて說きしもの是れ未顯眞實なり、此未顯眞實の法は迂廻道にして、菩提を成するの直道にあらず、今說く所は菩提の大直道にして、文理眞正尊無過上の法なりとして、四十餘年の所說を一言に權方便の說なりとし、無量義の一法を以て眞實敎として、如來の說敎の統歸あるべきものなるを說示せり、第三十功德品には初に此經の來至住の三義を明して、是經は諸佛の宝宅の中より發し來りて、衆生の發菩提に至り、菩薩所行の處に住すと云ふて、諸佛大慈の本願力と、吾等衆生の信念力と、感應道交して大功德事を成辨するものなることを示し給ひ

十功德力を擧げて其實證を示し給ふ、其十功德たるや現世相傳の益（第一淨心不思議力）より、來世絕對の益（第十登地不思議力）に至るまで、現當二世に亘りて其得益の大なるを顯示せられて、經文には詳細に說明されてあります、以上此經三品の大要でありますが、此三品に說示せられてある處を引纏めて見ますると、此經全體に顯はれた敎義は、宗敎上最も重要なる敎義であり、又其顯はされ方が最も順序よく顯はされて居るので、自分共初心の者に其要領が得易い樣に考へるのであります、そこで

▲宗敎上の重要敎義

と申すは其擇方は種々あらうと思ひますけれども、迹門の四一開會と、本門の四法光顯とを擧げますれば宗敎上の問題は大樣攝せらるゝことゝ思ひます、之も敎行理の三は重複でありますから、つまりは果法と敎行、人、理の四と合せて五箇の問題となるのであります、之を泰西の宗敎學上の言葉と照合すれば左の如く相成らうと思ひます

- 果法　超人觀
- 理法　宇宙觀
- 人法　人身觀
- 敎法　敎法觀
- 行法　行法觀

（理法・人法・敎法・行法：本質）（人法・敎法・行法：屬性）（本質・屬性：宗敎）

此中宗敎上の本質たる果法理法人法の三は、之れを佛法、衆生法、心法の三法として、天台大師は釋せられて居ります、然し此本質は宗敎の基礎的敎理として若くは觀念行の場合に於ては、之を論究し、其意義を會得し、之を證悟せねばならぬのでありますけれども、信仰を以つて進んで參るものには、宇宙觀人身觀の二は一應其道理を知り得さへすれば、深き智識を必要と致さないのであります、なぜかと申すならば、信念に依るものは、超人格者の絕待の力に信賴するを以て、其超人格者の絕待完全なることは要求するけれども、宇宙觀人身觀の上には、一應の理論として心得置く丈の事にて差支へないのであります、故に末法今日

の吾人の如き、但信無解の者には、超人格者の圓滿完全なるを求むることが、最も必要なる事柄であります屬性として擧げたる敎法行法の二は宗敎が實行に移るとき當然顯はれ來るべきもので、超人格者たる覺者が迷者を救濟せんとするに於ては、其救濟の方法として現身說法の身口二輪の活動が顯はるゝのであつて、此を敎法と名付けたるのである、既に敎法ありて其實行の方法を示さるゝあれは、其敎示に隨順して之を實現せんことを期するものあるは、當然の事であります、而して、行法ありて實行する以上、其當然の結果として、得益が顯はれるのであります、得益の事は五法の中には見る能はぬ樣ではありますが、是は果法を修因得果に約して見ますれば、果法を得益として論ずることが出來るのであります、斯樣な第てありますから、今日の吾々に最も必要なる宗敎上の重要敎義と致しましては、超人、敎法、行法、得益の四方面に對する觀察であろうと思ふのであります、此關係を圖示すれば

覺者（超人）格　悲→敎法←「應」「感道交」行法←信　得益　仰←迷者（吾人）

と云ふ樣な關係であらうと思ひます、そこで此四方面に對する觀察が、無量義經には整備して說明されてある樣に思ふのであります、今

▲此經の如說と宗敎上の重要敎義

と對照して見ますると、左の如きものにならうと思ひます

- 無量義經
  - 說法品——一法……敎法觀
  - 十功德品
    - 德行品——佛陀……超人觀
    - 來至住……行法觀
    - 十功德……得益觀

佛陀起敎の順序と今經說示の順序と能く符合し、而も夫が宗敎上重要の敎義を整備して居ると云ふことは、斯る小部の經文には甚だ珍らしい事であると思ひます又それがいづれも佛敎敎義の中には、最も勝れたる敎義であることも不思議に堪ぜらるゝのであります、これから其一々に就て說明致して見やうと思ふのであります

（己下次號）

國民教育 佛教實義講演會の記

朽木町本化行學會は明治四十三年十一月創立已來日蓮主義の宣揚を目的とし講演會廻覽文庫施本傳道隨力演說部少女會教書貸覽等の施設を以て地方思想界に努力する所あり且毎年一回大講演會を公開し教勢擴張を計るの例なるが特に大僧正本多日生猊下慶應大學講師マスターオブアーツ柴田一能先生を屈請し大正二年十二月三日午後六時より仝地劇場明治座に於て國民佛教實義講演會を開催したり是より先統一主任三上義徹師を介して兩講師の快承を得開會日時の確定したる十一月廿六日以來熱心なる青年幹部の諸員は殆ど晝夜兼行の姿にて護法の爲身心を捧げて活動したるが中にも辻張廣告の石版印刷を無料にて奉公せる玉光堂主玉田源一氏大工職を以て手傳へる渡邊芳三深夜街頭を奔走して廣告を辻張せる小池捨吉高橋正平石崎喜吉の諸氏又は新聞配達夫をして號外的に鈴を鳴して開會の時刻を急報せしめたる新聞業者大塚惣十郎氏此外招待狀の發信に會場設備に熱心盡力せる服部新五郎平岩平八郎壁山艶作上原信次郎島田政次郎高田安平高田久次等の諸氏ありために前日夕刻迄に會務は着々として進捗して唯當日の來るを待つ計りとなれり然るに細雨霏々として降り頻る前夜の天候は最も諸員の心を惱ましめしかば一同は事務所に參集し大本尊の御實前に法味を捧げ當日の諸緣吉祥敎益甚大ならんことを熱禱す明くれば三日陰雲空を覆いて少雨ありしも躊躇すべくもあらず何れ部署を定めて準備を整ふるにいつしか天晴れて地明かに氣溫暖和の好日和を現ぜる諸天の擁護は一同を踊躍せしめぬ正午過ぐる三十分停車場に本多大僧正を出迎ひ大塚金兵衛太田彌太郎塚原保吉篠崎儀右衛門服部新五郎高田久次等の委員前後に隨行し腕車を連ねて事務所に入る次て柴田一能師午後四時二十分着驛せられ小池高田服部等に迎いられて事務所に着直ちに紀念撮影を了し休憩せらる是より幹部員の大半は會場に

赴き定刻前より犇々と來集せる聽衆を迎ふ會場内外の裝飾は表通に面せる入口には青葉にて飾れる「國民教育佛教實義講演」と大書せる額を掲げ蓮花にて包める電燈は燦として輝きたり會場表には會名と講師を記せる大額を掲げ入口には會旗國旗を交叉し紅白の幕を張り又萬國旗線を引きて美觀を添えたり會場内は正面に金色燦爛たる浮彫の額緣に成せる朽木中學校長劉順氏の謹書せる「立正安國」の大額を中心に金屏風を引き廻らし盆栽をあしらひ中央に講壇を設け兩側にオルガン筆記臺を備へ絨壇を布き詰めたれば嚴肅莊重の氣溢えられたり又聽講席の周圍には「如日月光明能除諸幽冥」「不染世間法、如蓮華在水」「先安生前更扶沒後」「安世安國爲忠爲孝」「日本佛教之精粹、世界宗教之歸趣」等を大書して張りたれば更に一段の權威を加へたり入口にては聽講券を引替へて今回の施本として印行せる佐藤海軍少將述『法國冥合』及『行學會しをり』を交付し一々設けの席に案内し又特に慰藉の意味を以て招待せる盲人は婦人會員が懇到なる介抱を以て出入に不便なからしめたり斯くて刻々に群集せる聽衆は定刻六時にさしもに廣き席上に溢れ其混雜實に意想外なりき此時幹事は講師を案内して會場に入り背面の大廣間に整列せる七十餘名の少女會員の敬禮をうけらる折しも琴々たる太鼓の響き渡りて開會を報ずるや高田幹事立つて「開會の辭」を述べ行學少女會員一同は教師杉戸彌平氏引率され海老茶袴に銀モール製會章を胸間に燦めかせて正面に整列したるが其愛らしき風姿は滿場の視線を惹く時教師大塚宇一郎氏が彈奏する劉曉たるオルガンの音に連れ少女會員は一齊に莊重なる宗歌と勇壯なる立正歌を奉唱しぬ乃ち稻葉燈太郎氏の紹介にて柴田一能先生登壇『日蓮主義の使命』と題して先づ日蓮主義は戰鬪的なり奮鬪主義なりと前提し其開宗當時の史實より論明し法華經の眞理より發せる大義名分の主張は法國の兩面に涉りて宣明せらる即ち法は躰なり心なり國は影なり身なり躰曲れば影ゆがむ心正しからずんば身も亦邪さとなる法濁れば國亂る後の四箇格言は一面邪法の折伏と共に一面北條執權の下尅上を調伏せる

もの也是れ日蓮上人は佛教の眞義と日本の國體とが根本的に一致冥契せる不離の因緣にある事を道破せられたる卓見にして個人の安心も國家の興隆も世界の平和も悉く斯の立正安國の大義に根基すとて上人の世界統一主義を講明して降壇せられたり講演二時間半次に小池捨吉氏の紹介にて大僧正本多日生氏ドは滿場の拍手に迎ひられて壇に上り徐かに法華經藥舞論品の金文を讀誦せらるゝ事少時朗々大衆の耳朶に徹し場内寂として聲無し終りて『人生觀と日蓮主義』の講演に入り先づ本化行學會設立の意義を畧述し吾人が人生に處するに當り第一に考究すべき要義を示し現代人の缺陷たる唯物思想を打擊して心靈活動の研究を奬め明治天皇の御製

我こゝろをさむる道は學ばなん
しづがなりはひいとまなくとも

と詠し玉へる大御心を仰ぎ奉りても吾人の精神修養を一日も忽かにすべからず卽人生には生活道德の外に信仰の力を根抵となすべきなり信仰は心身に快樂を與ふる源なり見よ心に安住なき人々の憐れなる狀態を東に西に運命のさゝに左右せられ淺薄なる易占や九星に人生の行路を定めんと奔り回りつゝあるに非ずや根底に的確堅實なる信仰を有せるものはこの切迫せる生活に光明を認め道德に權威を有せしめ道の光となり國の護りとなりつゝあるを思へ行爲の規範たる道德は信仰の意義を根本とするに於て天地の公道と一致し剛体の精華とも現ずる也國民道德の頽廢せる今日之が匡救の道は但この立正安國の大義あるのみ國民は深く國躰の根源を辨へ正法の信仰に歸着すべきなりと結び進て日蓮主義の內容に論究せんとしたるも時間せまりたるため次回に讓りて降壇せらる講演約二時間に渉り莊重平明にして間々諸識を加へ警策を與へ聽衆恍惚として醉へるが如く時の移るを知らざるの有樣なりき服部幹事の「閉會の辭」に全く會を終れるは午後十一時今夕の來聽者は實に千七百有余名眞に立錐の餘地なく廊下及講壇附近さても人を以て滿されたるを見ても稀有の盛會にして教徒の甚大なる推知すべきなり閉會後幹部員は會場の設備を撤去し掃除を了り無上の法悅に充されて閑散したるは午前二時を過ぐる頃なりき

緊急廣告

縮刷 妙法蓮華經 並 開結

第壹種 紙裝 平價金貳拾錢 郵稅金四錢
第貳種 布裝 天金 正價金四拾錢 郵稅金六錢
第參種 皮裝 三方金 正價金八拾錢 郵稅金六錢

▲法華經は天地法界の秘藏思想統一の最高指針である、吾人の思想界に最高の指針がなければ向上發展することが出來ない、法華經は健全なる文明を產み出すべき大なる力である、人を人らしくする教である、此の法華經に現はれたる思想に靈化するを得ば眞實に文明人たる資格を得る、文明人たらんとするもの亦現に文明人を以て誇るものは必ず本經を拜讀せなければいかぬ、さうして法華經的思想の生活を送ることを努むることが自已の向上を致す所以である

▲一家の重寶として法華經を備へることを勸むる

▲本經は價が安くて携帶に便利であるし亦體裁も至つて宜い、御覽になれば成程と思はるゝ

▲送金は『振替口座東京一二一九番』へ御拂込になれば安全で手數が懸らない

發行所 東京淺草北清島町十四番地 統一團

大正二年の名殘史

時代の要求に應じて日蓮主義が急進的に勃興し來つたので天下の識者が競ふてこの靈光に觸れんとするの氣運になつた吾黨が大正二年の活動は未だ天下を覺醒するほどの目覺しきものはなかつたが少なくとも日蓮主義の如何なるものかは傳へ得たと信ずる

▲師走七日午後二時統一閣講演は京藤義應師井村日咸師の懇切なる講話があつた次て十四日は納會講演を開き三上師本多大僧正の熱烈なる論議教示があつて大正三年を迎ふるの用意を說き多大の訓化を與へ講演後階上にて茶話會ありて互に信仰談を交はし法悅に充ちた

東海道 十一月廿八日本多大僧正は豐橋警察署の招聘に應じ倫理思想の調節に就て二時間に亘る講演を爲し同日午後七時公德館樓上に開講井口師御長橋藤兩角兩聯隊長及師團將校等の參會あり

細谷稅務署長の開會に次て本多大僧正は健全なる人生觀に就て主要問題を論ずること二時間甚大なる感化を與へたりと云ふ

▲十二月九日午後六時吉美妙立寺に顯正會例會を開き白井師開會を宣し野中師は大上人の慈悲を說き吉田師は生活の價直を論じ國友師は樂と慣みに就て懇說する所あり大に法益無盡なりしと云ふ

京都 聖祖門下同志會は新進氣鋭の集合なれば京都の教界に向つて常に靈氣を與へつゝあるが大正二年の終りに役員の選擧を行ひ常置員に金光孝碩内藤孝道松井行英會計に淺井鳳道幹事に潮田惠網水谷諦見石井寛俊諸師之に當る事となりたりと云ふ

大阪 十二月十二日午後七時生玉前町堂閣寺に開講

本迹の意義　鷲田顯正
渦卷論　能仁一十
宇宙と吾人　高木治地
日蓮主義の輪廓　梶木日種

十三日午後七時寺町蓮成寺に開く

立志　鷲田顯正
自覺の力と日蓮主義　能仁一十
法華經的生活　高木治地
正義の信仰　松尾敏城
日蓮主義と人生觀　梶木日種

熱心なる講說に純信を起すものありしと云ふ

千葉 十二月十九日山武郡南橫川三光寺小竹俊雄師主催として日經上人建碑三周記念會を行ふ草切榮玉師導師の下に森嚴なる法要を營み小竹師山田師堂師長師の熱心なる講說あり二百餘名の參拜者無限の感に打たれ隨喜して信念を啓發するを得たりと同日來會者に施本として里見日潮師百部南橫川顯本講一百部佐久間保氏は二十部中貝權藏氏二十部有田平次郎氏は百部黑川文太郎氏二十部を寄附せられたりと云ふ

盛岡 十二月七日材木町大黑屋十日法華寺同夜大黑屋分店十三日商業學校同夜宮田重治氏宅にて熊井本光師の講演ありて盛會なりしと云ふ

新春の御慶自他幸甚

本多日生

東京府品川町顯本法華宗宗務廳
宗務總監　野口日主
法務部長　笹川日堂
教務部長　萩原啓門
會計部長　秋山乾英
錄事

顯本法華宗評議員
山根日東
鈴木日雄
井口善叔
森川寬行
三上義徹

恭賀新年

謹賀新年

顯本法華宗監督布敎師
今成日誓
能仁事一

京都總本山妙滿寺
本山部長　野老乾爲
鈴木孝碩
川崎英照
三須敎英

謹賀新春

東京大學林
今成日誓
井村日咸
關田養叔
熊井本光

賀正

千葉縣支學林
中田日遵
山岡會俊
齊藤海叔
土屋眞容
成島泰行

祝歲旦

謹賀新年

顯本法華宗宗會議員

東京品川本光寺　今成日誓
下總千葉町本圓寺　廣部永眞
上總茂原在山崎妙行寺　竹内端嚴
上總本納在長尾寶泉寺　神田日光
上總本納在太田萬光寺　木村乾中
上總大綱在田中本性坊　堂亮雄
上總片貝本隆寺　藤崎通明
上總東金妙德寺　白井日昇
下總中野本城寺　日暮玄靜
青森縣八戸町本壽寺　中田量叔
豐橋妙圓寺　國友日斌
名古屋新榮町常德寺　岡本圓正
大阪高津中寺町蓮成寺　梶木日種
岡山縣和氣本成寺　原田日勇
廣島松川町妙詠寺　島田顯恕
長州萩妙蓮寺　朝倉俊達

謹賀新年

顯本法華宗宗會議員

京都寺町二條法光院　金光孝碩
金澤六斗林本覺寺　内藤日耶

賀　正　京都東洞院久遠寺　坪永日監

賀　正　京都仁王門寂光寺中　石井寛俊

賀　正　廣島市新川場町本照寺　大橋日襲

賀　正　名古屋市八百屋町妙行寺　武聖麟

悲母の喪中に付き歳首の禮を缺く
伯耆松崎本立寺　窪田純榮

喪中に付年賀の禮を缺く
京都寺町二條大慈院　銀井乾升

賀　正　靜岡縣北松野本松寺　大津日文

賀　正　三河野田村法華寺　西山日諭

賀　正　會津妙法寺　住職　坂本日桓
副住職　竹内無着

賀　正　東京牛込原町久成寺　田井日晃

賀　正　小笠原父島大村顯本教會所　吉塚通榮

賀　正　東京淺草永住町妙經寺中　森義觀

賀　正　上總大綱町本寺　土屋賢生

賀　正　上總東金在松之郷本松寺　横溝日葉

賀　正　上總茂原在山根　大川日敎
同　千代丸　池澤快整

虔而開宗六百六十二年の
新春を祝し奉る

本化記者團
東京淺草北清島町

恭賀新年

▲法華宗專門法衣商▼

本店　京都市三條通烏丸東入　草木伊助

支店　東京淺草三好町二番地　草木伊助

▲品質精選迅速正直▼

新年の御慶自他幸甚

『大崎學報』 東京花原郡大崎町 日蓮宗大學同窓會
『國柱新聞』 靜岡縣清水港貝島鉄藝園内 師子王文庫
『統一』 東京市淺草區北清島町十四番地 統一團
『天晴地明』 仝所 天晴會
『活宗教』 東京市本郷區千駄木町團坂上 活宗教社
『天鼓』 甲州中巨摩郡小井川 天鼓社
『妙教』 東京市芝區二本榎西町二番地 妙教社
『村雲婦人』 小石川區白山前町大乘寺内 村雲婦人會
『北天教光』 後志國古平町三六三 北天教光社
『白蓮華』 靜岡縣富士郡上野村七十一番地 白蓮華社
『正法』 越後國蒲原郡本成寺大字要本坂寺五十一 正法社
『布教』 東京市下谷區谷中上三崎南町二 日蓮宗東京布教會
『白毫』 東京市深川區猿江町妙壽寺内 法誓社
『法の燈』 大阪府三島郡五領村上牧本證寺内 法の華社
『法の華』 名古屋市東區櫻町本證寺別院内 信友會月報部
『信友月報』 岡山市山崎町七六 岡山日蓮鐵仰會
『日蓮』 東京市麹町有樂町一ノ四 東京統一社
『統一評論』 東京府荏原郡目黒村 師子王會
『獅子吼』 東京下谷入谷町 大獅子吼社
『大獅子吼』 東京府池上町林昌寺内 日宗新報社
『日宗新報』 東京市京橋區木挽町一の十四 日宗新聞社
『日宗新聞』 東京府荏原郡南品川妙光寺内 自然鳴社
『自然鳴』 東京市牛込區早稲田鶴巻町 一佛土研究會

謹賀新年

宮殿●須彌段
前机●幢幡
大販賣

御來店の節は陳列場へ御來車被下度是れ迄とは一層勉强仕各宗の佛具一切陳列仕置候

正價 三法堂佛具發賣目錄

小包條例附(郵券四錢)

佛具と唱すれども此の種類數品有之候を以て一々記載する能はず。依て特に佛壇正價附賣目錄書を作製致置候に付御入用の諸君は。郵券四錢御送附被下候はゞ迅速呈上仕候。此の目錄を御覽あれば。寺院樣方の御入用品一切の買物何程違方でも安価にてき升。早く取よせ御覽あれ其の正價附の品は左の通り

注意

佛具と唱すれども此の種類數品有之候を以て一々記載する能はず。依て特に佛壇正價附賣目錄書を作製致置候に付御入用の諸君は。郵券四錢御送附被下候はゞ迅速呈上仕候。此の目錄を御覽あれば。寺院樣方の御入用品一切の買物何程違方でも安価にてき升。早く取よせ御覽あれ其の正價附の品は

●佛壇●仏具●小物●子●啓蟄●鐘●鈴●鐘●木魚●半鐘●木●鈴●金物●一切●過去帳●大殺若師●一切蓮華●理趣分●位牌●太鼓●引●打敷●和紙●唐紙●人天蓋●樂器類●施餓鬼●輪燈●屋根●木彫●水●木●刷子●刷毛●筆●墨●硯●筆●人●毛●筆●墨●硯●筆●墨●硯●筆●墨●硯

統一
第二百二十七號
明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
大正三年一月十五日發行（毎月十五日）

文學博士 三宅雄次郎君序
大僧正 本多日生師著

法華經講義

洋裝全二冊貳千頁
正價金四圓
特價金參圓
內地郵稅金貳拾錢
臺清韓八百匁迄の小包料

目次

◎序說●第一章緒言●第二章法華經の教義●第三章諸種の法華經觀●第四章天台の法華經觀
○第一節三種教相の綱格○第二節十雙權實の巧釋○第三節六重本迹の大旨○第四節三法々鈍の解釋○第五節待絕二妙の解釋○第六節一念三千の妙觀●第五章日蓮の法華經の觀妙○第一節本化別頭の教相○第二節但令用實の活斷○第三節佛界緣起の妙旨○第四節信念成佛の要道○第五節究竟圓慈の活釋○第六節聲色爲經の眞義○第七節應身常住の妙義○第八節本尊光顯○第九節兩善一貫の活論○十節台當教相の異目○第十節一唯身讀法華の壯觀●第六章天台講經要義○一節廣釋四教五時の統釋○五重玄義の妙解○第三節法華經の科段○第四悉檀運用の活釋○五節文々釋●第七章日蓮請經の玄義○第一節日蓮上人の學風○第二節本化獨特の五玄●第八章妙法華傳○譯の概略○釋文●科段●來意●大意●釋題●文々解釋○通解○妙解○異解○批判○質議○解決○字義○參考○讃唱

法華は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中心、佛教教觀の實歸にして、佛陀觀、宇宙觀、人身觀、教法觀、行法觀、その他教相教義の全般に亘りて之を調整し、發揮せるもの、苟も佛教の眞實を知らんと欲せば必ず法華經に來るべき也古今東西の法華經觀を網羅し、特に天台と日蓮との創見を發揮して更に新考案の下に佛教の積極的統一主義を闡明したる本書は實に佛教研究の上に現代及未來の光明たらん矣

發行所 東京淺草北清島町 振替東京一二一九 統一團

大正三年二月十五日發行（毎月一回十五日發行）

第二百二十八號

統一

大哉日蓮主義　大僧正 本多日生
時弊と教育　陸軍少將 小原正恒
日蓮主義と江川坦庵　海軍中將 宮岡直記
開結二經の研究　井村日咸
日蓮主義信仰の實感　藥學得業士 金澤巖
法華經中の文意質疑　辯護士 鈴木充美
現在主義の靈化　三上義徹

▲教光無盡▲活動通信▲